度志願ニ有之候ニ付御登用被下度試驗及第証書官記學位記卒業證書免許狀ノ寫及ヒ品行保証書相添此段奉願候也

前後ノ式ハ前ニ同シ

〔エ(三〇)〕穢多非人名稱廢止(明治四年八月廿八日布告)

穢多非人等之稱被廢候條自今身分職業共平民同樣タルヘキ事

〔キ(三一)〕金穀貸借請人辨償規則(明治八年六月八日第百九拾號布告)

明治六年六月第百九拾號布告金穀貸借請人証人辨償規則本年十月一日ヨリ左之通改正候條「同日以後借用証書ヘ加印候者ハ改正之通可相心得」此旨布告候事

金穀貸借請人証人辨償規則

第一條　金銀借用返濟相滯本人身代限濟方申付候上不足相立候節ハ其不足ノ分請人証人ヘ濟方申渡シ猶不相濟ニ於テハ其請人証人ヲモ身代限申付其上不足相立候ハヽ借主並ニ請人証人ハ勿論其相續人ニ至ル迄身代持直シ次第皆濟可致事

第二條　借主逃亡又ハ死去跡相續人無之時ハ其請人証人ヘ濟方申渡シ候上不相濟ニ於テハ身代限申付猶不足立候ハヽ請人証人ハ勿論其相續人ニ至ルマテ身代持直シ次第皆濟可致事

第三條　身代限申付候上不足相立身代持直シ次第皆濟可致旨左ノ雛形之通裁判所ニ於テ其ノ原証文ノ裏ヘ記シ押印ノ上貸主ヘ可相渡置事

裏書雛形

第一條ノ節書式

表書ノ元利金何百何拾圓相濟サルニ付借主何ノ誰身代限申付ル處不足相立請人証人何ノ誰ヲモ身代限ヲ以テ辨償爲致都合金何百何拾圓ニ相成ニ付右請取殘リ何百何拾圓ハ借主何ノ誰請人証人何ノ誰ハ勿論其相續人ニ至ルマテ身代持直シ次第皆濟可致モノ也

年　月　日　　某裁判所印

第二條ノ節書式

表書ノ元利金何百何拾圓借主何之誰失踪死去跡相續人無之ニ付請人証人何ノ誰ヘ身代限ヲ以テ辨償申付ル處金何百何拾圓ニ相成ニ付右受取殘何百何拾圓ハ請人証人何ノ誰ハ勿論其相續人ニ至ルマテ身代持直シ次第皆濟可致モノ也

年　月　日　　某裁判所印

〔ミ(三二)〕苗字設定法(明治元年十一月十九日布告)

諸藩トモ從來國名等ヲ以テ性氏ニ替ヘ相用候得共向後總テ本姓ヲ可稱旨被仰出候事

○明治八年二月十三日第二十二號

平民苗字被差許候旨明治三年九月布告候處自今必苗字相唱可申尤祖先以來苗字不分明ノ向ハ新タニ苗字ヲ設ケ候樣可致此旨布告候事

〔シ〕(二三)私生子處分(明治六年一月十八日第廿一號布告)

妻妾ニ非サル婦女ニシテ分娩スル兒子ハ一切私生ヲ以テ論シ其婦女ノ引受タルヘキ事

但男子ヨリ已レノ子ト見留メ候上ハ婦女住所ノ戸長ニ請テ免許ヲ得候者ハ其子其男子ヲ父トスルヲ可得事

(二四)人民實印處分(明治五年七月十日第百九十七號)

人民實印ノ儀ハ諸事證據ニ相成大切ノ品ニ候處妄ニ他人ヘ相預ケ候者有之ニ付間々奸詐ノ訴訟差起リ以ノ外ノ事ニ候以來實印相預候儀固被禁候條萬一心得違ノ者有之節ハ預ケ人預リ人共屹度可及所置候事

(二五)社寺ニ於テ金穀借入方(明治十年五月十六日第四十三號布告)

神社並寺院ニ於テ其社寺ノ爲メ金穀ヲ借入ルヽトキ若クハ金穀ヲ借入ルヽ爲メ社寺附地所除稅地ヲ除クノ外建物什器寶物古文書類ヲ除クノ外等ヲ抵當トナストキハ必ス氏子檀家ト協議シ總代二名以上ノ連署ヲ要スヘシ若シ此連署ナキトキハ總テ該社寺神官僧侶ノ私債ト看做シ縱令右ノ抵當アルモ其効ナキモノト爲スヘシ

(二六)寺院什物帳調製方(明治六年三月五日第八十九號布告)

今般僧侶身代限規則被相定候ニ付テハ寺院所有ノ田園建造物諸器什檀家ヨリ寄附ノ分又ハ法用ニ必用ナル分並ニ古來傳承ノ寺寶等ノ部分判然相立不申候テハ差支候條左ノ規則ニ從ヒ寄附帳什物帳相綴リ置可申候

一寄附帳ニハ何年何月何誰寄附ノ田園反別建造物坪數諸器物ノ質分ニ至ルマテ詳細ニ記載スヘシ

一什物帳ニハ法用ニ必要ノ分並ニ寺寶ヲ區別シ記載スヘシ

一右二帳二部ツヽ相綴リ檀家法類共兩人以上並ニ其地ノ戸長檢査ノ上各姓名ヲ署シ之レニ調印シ一部ハ戸長役場ニ藏シ一部ハ其寺院ニ藏シ置クヘシ

〔セ〕(二七)絶家期限(明治十七年六月十日第廿號布告)

單身戸主死亡又ハ除籍ノ日ヨリ滿六ケ月以內ニ跡相續者ヲ屆出サルモノハ總テ絶家トス

右奉　敕旨布告候事

○明治十七年六月十日第十四號布達

今般第廿號布告ヲ以テ絶家期限制定候ニ付テハ從前死亡又ハ除籍シタル者ハ該布告施行ノ日ヨリ滿六ケ月以内ニ跡相續者ヲ屆出ルヿヲ得

第三編　訴訟法　附裁判所構成法

〔ト〕(一)登記官吏公証人抗告手續（明治十九年十一月九日司法省令甲第三號）

今般法律第一號第二號ヲ以テ登記法及公証人規則制定相成候ニ付其抗告手續左ノ通之ヲ定ム

第一條　登記官吏又ハ公証人ノ職務執行ニ關シ抗告ヲ爲ス者ハ抗告狀ヲ其登記官吏又ハ公証人ニ差出スヘシ

第二條　登記官吏又ハ公証人抗告狀ヲ受取リタルトキハ其翌日ヨリ三日以内ニ意見ヲ附シ且ツ關係書類ノ寫ヲ添ヘ抗告狀ヲ管轄始審裁判所ニ送致スヘシ

第三條　登記官吏又ハ公証人若シ前條ノ期限内ニ抗告狀ヲ管轄始審裁判所ニ送致セサルトキ又ハ急速ヲ要スル場合ニ於テハ抗告者ハ直チニ管轄始審裁判所ニ抗告狀ヲ差出スヿヲ得

始審裁判所ハ抗告ヲ受ケタル登記官吏又ハ公証人ヲシテ意見書ヲ差出サシメ及關係書類ヲ求ムルヿヲ得

第四條　登記官吏又ハ公証人ハ其職務執行上ニ關シ抗告ヲ受ケタルトキハ其處分ヲ停止スヘシ

第五條　抗告狀ヲ受取タル管轄始審裁判所ハ書面ニ依リ判定ヲ爲スヘシ

始審裁判所ハ必要ナリト認ムル場合ニ於テハ抗告者其他關係人ニ書面ヲ以テ答辨セシムルヿヲ得

第六條　始審裁判所ハ抗告ノ判定書ヲ管轄治安裁判所ニ送致シ之ヲ登記官吏又ハ公証人及抗告者ニ送付セシムヘシ

始審裁判所ニ於テ抗告ヲ正當ナリト判定シタルトキハ登記官吏又ハ公証人ハ其判定ニ依リ處分ヲ更正スヘシ

第七條　公証人懲罰處分ニ對シ不服アル者ハ其處分ノ翌日ヨリ起算シ七日内ニ其處分ヲ爲シタル管轄始審裁判所ニ抗告狀ヲ差出スヘシ

裁判所ハ其抗告ヲ正當ナリト認ムルトキハ速ニ其不服ノ點ヲ更正スヘシ若シ之ヲ正當ナラスト認ムルトキハ第二條ノ期日内ニ意見ヲ付シ關係書類ヲ添ヘ抗告狀ヲ管轄控訴院ニ送致スヘシ

第八條　公証人懲罰處分ニ對スル抗告ニ付テモ亦第三條ノ手續ニ依ルヿヲ得

第九條　公証人懲罰處分ニ對スル抗告狀ヲ受取タル控訴院ハ第五條ノ手續ニ從ヒ判定ヲ爲スヘシ

第十條　控訴院ハ其判定書ヲ處分ヲ爲シタル始審裁判所ニ送致シ之ヲ言渡サシムヘシ

控訴院ニ於テ抗告ヲ正當ナリト判定シタルトキハ處分ヲ爲シタル始審裁判所ハ其判定ニ依リ處分ヲ更正スヘシ

第十一條　抗告ノ判定ニ對シテハ總テ上訴ヲ爲スヲ得サルモノトス

〔カ〕(二)貸金裁判ノ取捨

○明治五年十月廿二日第三百十七號布告

平民相互ノ金穀貸借慶應三年丁卯十二月晦日以前ニ係ル者ハ一般裁判ニ不及明治元年戊辰正月元日以後ノ分ハ裁判ニ及候事

○明治六年一月十三日第九號布告

昨壬申歳第三百十七號平民相互金穀借貸慶應三年丁卯十二月晦日以後ニ係ル者一切不及裁判旨及布告候處動産（金銀衣服家什等ノ搬運スヘキ者ヲ云フ）不動産（土地家屋等ノ搬運スヘカラサル物ヲ云フ）ヲ質物ニ取候分ハ右期日以前ニ係ルト雖モ取上及裁判候條此旨相達候事

〔タ〕(三)代言人規則（明治十三年五月十三日 甲第一號布告）

第一款　總則

第一條　代言人ハ法令ニ於テ代言ヲ許サレタル詞訟ニ付テ原告又ハ被告ノ委任ヲ受ケ其代

言ヲ爲ス者トス

第二條　代言ノ業ヲ爲サント欲スル者ハ第四款ニ掲クル所ノ手續ニ依リ定式ノ試驗ヲ經テ司法卿ノ免許ヲ受クヘシ

第三條　免許ヲ受ケシ代言人ハ大審院及諸裁判所ニ於テ代言ヲ爲ヲ得

第四條　代言人ノ免許ヲ得ル能ハサル者左ノ如シ

一　未丁年者

二　身代限ノ處分ヲ受ケ未タ辨償ノ義務ヲ終ヘサル者

三　盜罪詐僞罪ニ付キ刑ヲ受ケタル者

四　國事犯ヲ除クノ外懲役並ニ禁獄一年以上ノ刑ヲ受ケタル者

五　官吏准官吏及ヒ公私ノ雇人

第五條　免許ヲ受ケシ者ハ必ス第二款ニ掲クル所ノ代言人ノ組合ニ入リテ其規則ヲ守ルヘシ若シ一時他管ニ出テ代言ヲ爲ヲスハ其地組合ノ規則ヲ遵守スヘシ

第六條　代言人新ニ免許ヲ受ケシ時及ヒ他ノ地ニ轉住セント欲スルヲハ其業ヲ爲ス所ノ裁判所及ヒ檢事（檢事ナキ地ハ檢事ノ職務ヲ擬行スル者以下之レニ倣フ）幷ニ議員長ヘ其旨ヲ屆ケ廢業ノ時ハ免許狀ヲ檢事ニ返納スヘシ

第七條　代言免許ハ滿一年（月ヲ以テ算フ）ヲ以テ限トシ免許料ハ金拾圓トス其業ヲ繼續セント欲スル者ハ毎年免許料ヲ納ム可シ既ニ納メタル免許料ハ廢業停業除名ノ時ト雖ヒ之ヲ還付セス

第八條　新規出願ノ者ハ免許狀ヲ受クル時免許料ヲ直チニ檢事ニ納ムヘシ

引續出願ノ者ハ必ス免許期限ノ盡ル前願書ニ免許料ヲ添ヘ檢事ニ差出ス可シ但シ手續ヲ爲シタルヲハ期限後ニ至リ未タ免狀ノ下付有ラサルモ其儘代言ヲ爲スヲ得ヘシ

第九條　免許料ヲ納メサルヲ以テ免許ヲ得ス又ハ期限前ニ於テ引續願ヲ爲サスシテ免許ノ効ヲ失ヒシ者再ヒ代言ヲ爲サント欲スル時ハ新規出願ノ手續ニ循フヘシ

第十條　免許狀ヲ紛失シ又ハ氏名ヲ改メシ者ハ更ニ免許狀下付ノ願ヲ檢事ニ出スヘシ但願書ノ副本ニ檢事ノ捺印ヲ受ケ置キ引替免許狀下付迄ハ之ヲ以テ免許代言人タルノ証ト爲スヘシ

第十一條　代言ヲ爲スニハ必ス訴訟本人ノ委任狀ヲ受クヘシ

第十二條　代言人ノ懲罰ハ第三款ニ依テ處分スヘシ

第十三條　代言人ノ所業ニ因リ生シタル訴訟本人並ニ相手方關係人ノ損害ハ其代言人ニ於テ之ヲ償フ可シ

第二款　議會

第十四條　代言人ハ各地方裁判所本支廳所轄毎ニ一ノ組合ヲ立テ議會ヲ設ケ左ノ目的ヲ以

テ規則ヲ定メ契約ヲ固クスヘシ但組合ハ各裁判區ノ廣狹遠近ニ因リ檢事ノ見計ヲ以テ之ヲ合スルヿアル可シ

一　互ニ風儀ヲ矯正スル事

二　名譽ヲ保存スル事

三　法律ヲ研究スル事

四　誠實ヲ以テ本人ノ依頼ニ應スル事

五　强テ本人ノ權利ヲ揑造セサル事

六　妄リニ言詞ヲ變改セサル事

七　故ナク時日ヲ遷延セサル事

八　相當謝金ノ額ヲ定ムル事

但該規則ハ必ス檢事ノ照閲ヲ經可シ其改正增補モ亦之ニ同シ

第十五條　組合每ニ會長一名副會長一名又ハ二名ヲ每年第一次會ニ於テ投票ノ多數ヲ以テ定ムヘシ若シ投票ノ數相均シトキハ先キニ免許ヲ得タル者ヲ以テシ其時日相同シキトキハ長年ノ者ヲ以テ之ニ充ツヘシ

第十六條　會長ハ議會ノ管理ヲ爲シ副會長ハ會長ヲ補助シ會長差支アルトキハ之カ代理ヲ爲スヘシ其任期ハ各滿一年トス但每期投票多數ヲ得ルモノト雖モ其職務繼續スルハ三期ヲ以テ限リトス

第十七條　第二十二條ニ記載シタル條件ヲ犯ス者アルトキハ各代言人ハ之ヲ會長ニ報告シ會長ハ之ヲ檢事ニ告發スヘシ

若シ會長告發ヲ遷延シ又ハ其所犯會長ニ係ルトキハ各代言人ヨリ直チニ檢事ニ告發スヘシ

第十八條　議會ヲ開クハ每年二次ヲ以テ定例ト爲シ其日數一次十五日ヲ過クヲ得ス若シ已ムヲ得サル場合ニ於テ期日ヲ延サントスルカ又ハ臨時會ヲ開カントスルトキハ必ス檢事ノ認可ヲ受クヘシ但其會費ハ各代言人ニ於テ之ヲ擔當スル者トス

第十九條　會長ハ組合總員ノ名簿ヲ作リ其本貫族籍住所年齡及ヒ代言免許ノ年月日ヲ記シ轉住廢業懲罰ノ事アル每ニ其旨ヲ記ス可シ

第二十條　議會中詞訟事件ニ付參會スルヲ得サル場合ニ於テハ其旨ヲ會長ニ屆出ツヘシ

第二十一條　會長及ヒ副會長ト雖モ代言ノ職業ニ付テハ一般ノ代言人ト異ナルナシ

第三款　懲罰

第二十二條　代言人左ノ條件ヲ犯ストキハ輕重ヲ量リ第二十三條及ヒ第二十四條ニ依テ懲罰スヘシ

一　訟廷ニ於テ現行ノ法律ヲ誹譏スル者

二　訟廷ニ於テ官吏ニ對シ不敬ノ所業ヲ爲ス者

三　訟廷ニ於テ相手方ヲ凌辱罵詈シタル者
四　詞訟ヲ教唆シタル者
五　証據ト爲ルヘキ者ヲ揑造シタル者
六　他人ノ詞訟ヲ買取リ自己ノ利ヲ圖ル者
七　强テ謝金ヲ前収シ又ハ過當ノ謝金ヲ貪リタル者
八　故ラニ時日ヲ遷延シ詞訟本人幷ニ相手方關係人ノ妨害ヲ爲シタル者
九　議會組合ノ外私ニ社ヲ結ヒ號ヲ設ケ營業ヲ爲シタル者
十　議會ニ於テ定メタル取締規則ヲ犯シタル者

第二十三條　懲戒ノ目次左ノ如シ

一　譴責
二　停業
三　除名

第二十四條　所犯法律ニ該ル者ハ法律ニ依テ處斷シ仍ホ第二十三條ノ罰目ヲ併科スルヿアルヘシ

第二十五條　譴責ハ止タ呵責シテ業ヲ停メス停業ハ一月以上一年以下其業ヲ停メ除名ハ代言人名簿ノ名ヲ除キ三年ヲ經ルノ後ニ非ラサレハ復タ代言人タルヲ得ス若シ其所犯ノ情狀重キ者ハ終身之レヲ許サス

第二十二條ノ懲罰ヲ受ケタル者アルトキハ其旨ヲ裁判所ノ扣所ニ掲示スヘシ

第四款　出願

第二十六條　代言免許ヲ願フ者ハ第二十九條ノ書式ニ倣ヒ願書ヲ作リ現住戸長又ハ區長ノ奥印ヲ受ケ履歴書ヲ添ヘ其所轄ノ撿事ニ差出シ定式ノ試驗ヲ受クヘシ

第二十七條　出願定月

二月　八月　各上半ケ月ヲ以テ限リト爲ス

第二十八條　試驗ノ課目左ノ如シ

一　民事ニ關スル法律
二　刑事ニ關スル法律
三　訴訟ノ手續
四　裁判ニ關スル諸規則

第二十九條　願書及ヒ履歴書式

代言願

本貫住所（寄留ナルトキハ其寄留ヲ記入ス可シ）
身分

代言營業仕度ニ付御試驗ノ上免許被成下度此段奉願候也

年號月日

氏名
年齡
右
名氏印

司法卿某殿

前書ノ通出願候ニ付奥印致候也

右戸長（又ハ區長）
氏名印

履歴書

一　地名身分何某ニ隨ヒ何年ヨリ何某年何學修行何某ニ隨ヒ何技術ヲ修行

本貫住所（寄留ナルトキハ其寄留所ヲ記スヘシ）
身分
職業
氏名
年齡

一　何年月日何（官職）任シ何年月日（免官辭職）

一　何年月日何々ノ廉ヲ以テ何廳ヨリ賞典ヲ受ク

一　何年月日何々ノ犯罪ニ依リ何ノ刑ヲ受ク

一　何年月日身代限ノ處分ヲ受ケ何年月日辨償ノ義務ヲ終フ

右ノ通ニ御坐候也

年號月日

代言引續願（免許狀紛失氏名改換ノ時ノ願書モ此式ニ倣フ可シ）

引續代言營業仕度候ニ付免許狀御下付被下度此段奉願候也

本貫住居（寄留ナルトキハ其寄留所ヲ記スヘシ）
免許代言人
氏名印

年號月日

司法卿某殿

○明治十三年十一月廿九日丙第十六號達

明治十二年五月司法省丙第七號達左ノ通改正候條此旨可相心得事

文部省所轄東京大學法學部ニ於テ法律學卒業ノ者代言營業出願セシトキハ明治十三年五月司法省甲第一號布達改正代言人規則第二十七條（出願期月）第二十八條（試驗課目）ニ關セス免許狀授與候

條右出願ノ節ハ卒業免狀ヲ檢査シ願書ニ其寫ヲ添ヘ進達可致此旨相達候事
但本文試驗ニ關スルモノヽ外代言人規則ニ準據スルハ一般代言人ト異ナルヿナシ

〔ソ〕(四)訴答文例(明治六年七月十七日第二百四十七號布告)

第一卷　原告人ノ訴狀

第一章　原告人ヨリ被告人住所身分ノ書付ヲ取ル事

第一條　訴訟ヲ爲サントスル原告人ハ其管轄ノ(町村)役場ノ添翰ヲ以テ被告人ノ現住管轄ノ(町村)役場ニ至リ被告人ノ身分ノ書附ヲ取リタル後訴狀ヲ作ルヘシ若シ住所氏名身分明瞭ナラハ其書附ヲ取ルニ及ハス

住所トハ某(府縣)管下某國某郡某(町村)住居又ハ寄留ト記スノ類身分トハ官名役名華族士族神職僧尼白姓何職何商賈何渡世ト記スノ類若シ一戸ノ本主ニ非ラスシテ子弟又ハ厄介ノ類ハ某ノ子弟又ハ某ノ厄介ト記スヘシ

第二條　原告人被告人ト管轄ヲ異ニシ道路隔絶ナラハ原告人我管轄ノ(町村)役場ニ願ヒ役場ノ文通ヲ以テ被告人ノ氏名住所身分ノ書附ヲ取ルモ亦妨ケナシトス但シ役場文通ノ入費ハ原告人ヨリ償フヘシ但此章原告外國人ナルトキハ本人名前本國職分及ヒ寄留ノ處ヲ訴狀中ニ記載シ次ニ被告ノ名前職分住所等委細記載スヘシ

第三條　代書人ヲ用フル事

第四條

第五條

○右第二章三ケ條ハ明治七年七月十四日第七十五號布告ヲ以テ代書人ヲ撰ミ代書セシムルト否トハ本人ノ情願ニ任セラレ訴答文例中之レト抵觸スル廉々ハ總テ廢止セラレタルニ付キ略ス以下皆同シ

第三章　訴狀ノ定則ノ事

第六條　訴狀ヲ作ルニハ左ノ定則ニ循フ可シ

第一　訴狀ハ簡明確實ニシテ憑據ト爲スヘキ事件ヲ掲ケ文飾冗長ナラサルヿニ注意シ自己ノ想像ヲ以テ踪跡ナキ事件ヲ述フルヿヲ得ス

第二　一切ノ訴狀ハ首ニ原被告人ノ氏名ヲ記シ住所身分ヲ肩書ニシ其末ニ年月日ヲ記シ原告人ト代書人トノ氏名連印スヘシ(附錄第一號ヲ見合ス可シ)
但外國人ノ爲メニ第一章但書ヲ見ルヘシ

第三　訴狀ノ末ニ署スル氏名ハ其本人自署ス可シ若シ自署スルヿ能ハサルトキハ其旨ヲ氏名ノ肩ニ記スヘシ

第四　訴狀ハ十六行ニノ一行十五字詰ニ認メ正副二通ヲ具スヘシ

但外國人ノ訴狀ハ銘々英佛語ヲ以テ認ルヿヲ得ヘシ其日本飜譯ハ裁判所ニ於テ正副二通ヲ認メ其手數料ヲ取立ツヘシ

第五　被告人ノ住所呼出ヲ受クヘキ裁判所ノ八里ノ距離外ニ在ルトキハ其里數ヲ被告人ノ氏名ノ左側ニ記載スヘシ若シ八里以内ナルトキハ其里數ヲ記載スルニ及ハス

第四章　訴狀ノ書式ノ事

第七條　貸附米金等淹滯ノ訴狀

貸附米金等淹滯ノ訴狀ハ住所氏名ノ次ニ米金元利ノ計算ト貸渡シタル年月日トヲ標配シ次ニ証書ノ全文ヲ寫載シ次ニ期ヲ過キテ返濟セサル事情ヲ書スヘシ（附錄第二號ヲ見合スヘシ）

田畠ヲ貸渡シタル小作米金又ハ物品ノ損料金又ハ諸種ノ立替金又ハ召抱人等ノ引負金又ハ職人等ノ前貸米金又ハ貸地貸家等ヲ受取ラントスルノ訴狀モ亦本條ニ照スヘシ

但以下十九條迄原告外國人ナルトキハ其訴訟ノ趣意並願意ヲ簡明ニ記載スヘシ

但附錄第十八號ヲ見合スヘシ

第八條　預ケ米金淹滯ノ訴狀

預ケ米金淹滯ノ訴狀モ住所氏名ノ次ニ米金ノ員數ト預ケタル年月日トヲ標記シ次ニ其証書ノ全文ヲ寫載シ次ニ違約シテ返濟セサル事情ヲ書スヘシ

借地等ノ敷金又ハ妻及ヒ養子女等ノ持參金又ハ實家若クハ親族等ノ仕送リ金ヲ受取ラントスルノ訴狀モ亦本條ニ照スヘシ

第九條　賣掛代金淹滯ノ訴狀

賣掛代金淹滯ノ訴狀モ住所氏名ノ次ニ金高ヲ標配シ次ニ其帳面總計ノ高ヲ出シ之ニ被告人ノ証印アルヿヲ記入シ次ニ違約淹滯シタル事情ヲ書スヘシ（附錄第三號ヲ見合スヘシ）（圏點ヲ施ス數字ハ明治十年第四十四號布告及ヒ司法卓丁第二十七號達ニ因リ消滅ス）（此項ハ明治十年第四十四號布告ニ因テ消滅ス）賣掛代金云々

第十條　手附金賣買違約ノ訴狀

諸物品ヲ買ヒ手附金ヲ渡シ約定期限内ニ殘金ヲ渡サントスルトキニ至リ被告人違約シテ諸物品ヲ渡サヽルノ訴狀モ住所氏名ノ次ニ買附タル物品ノ總高次ニ手附金ヲ渡シタル年月日及ヒ殘金ヲ渡シ物品ヲ受取ルヘキ約定期限ノ年月日ヲ標記シ次ニ約定書ノ全文ヲ寫載シ次ニ違約ノ事情ヲ書スヘシ（附錄第四號ヲ見合スヘシ）

諸物品ヲ賣リ手附金ヲ受取リ約定期限ニ到リ殘金ヲ受取ルヘキトキニ被告人違約シテ殘金ヲ渡サヽルノ訴狀モ住所氏名ノ次ニ手附金ヲ受取リタル年月日及ヒ殘金ヲ受取リ物品ヲ渡スヘキ約定期限ノ年月日ヲ標記シ次ニ約定書ノ全文ヲ寫載シ次ニ違納ノ事情ヲ書スヘシ（附錄第五號ヲ見合スヘシ）

第十一條　受負料淹滯ノ訴狀

諸職業受負淹滯ノ訴狀モ住所氏名ノ次ニ受負ヒタル年月日ト受負ノ金高ト既ニ受取リタル金數ト未タ受取ラサル金數トヲ標シ次ニ約定書ノ全文ヲ寫載シ次ニ違約ノ事情ヲ書スヘシ

第十二條　奉公人違約ノ訴狀

奉公人ニ年期ヲ約シ前金ヲ渡シ其年期未滿内ニ其家ヲ出テ還フサル者ヲ取還サントスルノ訴狀モ住所氏名ノ次ニ抱入レタル年月日ト約定ノ年期ト前渡シノ金數トヲ標記シ次ニ其評書ノ全文ヲ寫載シ次ニ違約ノ事情ヲ書スヘシ

職業傳習ノ弟子職業練熟ノ後ハ禮奉公ノ年期ヲ約シ年期未滿内ニ其家ヲ出テ還ラサル者ヲ取戻サントスルノ訴狀又本條ニ照ラス可シ奉公又ハ弟子奉公人ノ者等其主人師匠ヨリ受取ル可キ給米金淹滯ノ訴狀モ亦本條ニ照ス可シ

第十三條　專賣免許ヲ犯シタルノ訴狀

專賣ノ免許ヲ得タル者ヨリ他ノ摸倣密賣スル者ヲ差留メントスルノ訴狀モ住所氏名ノ次ニ專賣免許ヲ得タル年月日ト免許ヲ受ケタル役所ノ名ト專賣免許ノ年限トヲ標記シ次ニ免許ノ証印又ハ証書ヲ寫載シ次ニ其密賣ノ事情ヲ書スヘシ

諸商工專賣ノ免許ナクシテ株式ト稱スル者ハ自己ニ妨ケアルヲ以テ他人ノ商業ヲ差留ル事ヲ訴フルヿヲ得ス

第十四條　商社中取引ノ訴狀

商社中甲ノ商人ヨリ乙ノ商人ニ對シ各種ノ取引ノ米金又ハ物品ノ類ニテ乘合商賣ト稱スル者モ証書確實ナル者ハ之ヲ訴フルヿヲ得ヘシ其訴狀ハ取引ノ摸樣ニ付キ各種ノ本條ニ照スヘシ

先キニ開キシ商社ニ後ニ開カントスル商社ノ妨クルヿアルヲ以テ之ヲ訴ルヿヲ得ス但シ專賣免許ヲ犯スヿヲ得サルノ法ト相抵觸スルヿナカルヘシ（第十二條ヲ見合スヘシ）

第十五條　夫妻離別ノ訴狀

夫妻離別ノ訴狀モ住所氏名ノ次ニ夫妻ノ氏名生年及ヒ婚姻ノ年月日ヲ標記シ次ニ其戸長役場ヘ屆置キタル戸籍人別ヲ寫載シ次ニ離姻ヲ爲スヘキ原由ヲ書スヘシ

原告人夫ナレハ其父母若シ父母在ラサレハ祖父母、祖父母アラサレハ尊族ノ親尊族ノ親在ラサレハ同等ノ親同等ノ親在ラサレハ卑族ノ親卑族ノ親在ラサレハ近隣又ハ朋友ノ内二人以上ノ奥書連印ヲ爲スヘシ（附錄第六號ヲ見合スヘシ）

原告人妻ナルモ前條ニ照ラシテ其父母親族等ヨリ訴フヘシ若シ事危急ニ出テ親族等ニ告クルニ暇ナキトキハ自ラ訴フルヿヲ得ヘシ

第十六條　養子女離別ノ訴狀

養子女ヲ離別スルノ訴狀モ住所氏名ノ次ニ養父母及ヒ養子女ノ生年ト其養子女ト爲シタ

ル年月日ヲ標記シ次ニ原被雙方ノ戸籍人別ヲ寫載シ次ニ離別スヘキ原由ヲ書シ原告人親族アラサレハ近隣又ハ朋友ノ内二人以上ノ奥書連印ヲ爲スシ

本生父母ヨリ養子女ヲ取戻サントスルノ訴狀モ本條ニ照スヘシ本生父母在ラサレハ其親族ヨリ訴フルヿヲ得ヘシ養子女ヨリ養父母ヲ相手取リテ自ラ離別ヲ請フノ訴ヲ爲スヿヲ得ス

第十七條 家督相續ノ訴狀

家督相續ヲ爭フ訴狀モ住所氏名ノ次ニ亡父母ハ死亡ノ年月日生父母ハ其生年ニ原被告人生年トヲ標記シ次ニ其原被双方ノ戸籍人別ト讓狀遺狀等ノ証書アレハ其全文ヲ寫載シ次ニ自己相續スヘキ條理ト被告人相續スヘキ條理ナキヿヲ書スヘシ（附錄第六號ヲ見合スヘシ）

第十八條 田畑山林等賣買違約ノ訴狀

田畑山林屋敷建家等ヲ買ヒ之ハ受取ラントスルノ訴狀及ヒ貸地貸家ヲ取戻サントスルノ訴狀モ第十條第二項ニ照スヘシ

田畑山林建家等ヲ賣リ之ヲ引渡シテ其代價ヲ受取ラントスル訴狀モ第十條第二項ニ照スヘシ

第十九條 經界ヲ爭フノ訴狀

國郡鄕村山川田宅等ノ分界ヲ爭フ訴狀モ住所氏名ノ次ニ其舊記繪圖ノ枚數ヲ標記シ次ニ

舊記繪圖ノ寫ハ別冊ト爲シ目錄ヲ附シ各番號ヲ朱書スヘシ

繪圖ハ色ヲ以テ區別シ原告ノ區域ハ淺紅色ヲ用ヒ被告ノ區域ハ黃色ヲ用ヒ爭フ所ノ區域ハ着色ヲ用ヒス其他ノ經界ハ別色ヲ用フヘシ（附錄第七號ヲ見合スヘシ）

但シ第七條但シ書ヲ見ルヘシ

第二十條 被告ノ訴狀

原被告人豫審又ハ終審ノ裁判言渡ヲ受ケ其裁決ニ服セスシテ之ヲ上等ノ裁判所ニ控訴セントスルノ訴狀ハ住所氏名ノ次ニ訴訟ノ題目ト其年月日ト裁判所ニ呼出サレタル度數其年月日ト訟廷ニ臨ミタル裁判役ノ氏名ヲ知ルヲ得ヘキニ於テハ之ヲ記載シ次ニ其裁判言渡書ノ寫ト裁決ニ服セサルノ旨趣トヲ書シ且ツ前訴狀ノ寫ヲ別冊ト爲シ訴出ヘシ（但書ハ明治八年第九十三號布告控訴上告手續ニ因テ刪除シ第二項ハ同年第九十一號布告上等裁判所章程第一條ニ因テ削除ス故ニ之レヲ略ス）

第五章

一冊ノ訴狀ハ一事件ニ止マルヘキ事

第二十一條 原被告人共人員多少ニ拘ハラス訴狀ハ一事ヲ一冊ニ書スルニ限ルヘシ又原告人一名ニシテ仝時ニ數件ヲ訴フルモ訴狀ヲ各冊ニ作ルヘシ

第六章

一冊ノ訴狀ニシテ三件以上ヲ合スヲ得ル事

第二十二條 貸借二事以上ニシテ原被告人共別人ニ非ラサレハ一冊ノ訴狀ニシテ二件以上

ヲ合スヲ得ヘシ

第七章　原告人連名ノ訴狀ノ事

第二十三條　債主連名ノ証文ヲ以テ米金等ヲ貸附タル訴狀ハ連名ヲ以テ訴フヘシ若シ債主連名三人ナルヲ一人ニシテ訴フルトキハ他ノ二人ヨリ依頼ノ証書ヲ以テ訴フヘシ（附錄第八號ヲ見合スヘシ）

第二十四條　債主二人以上ニシテ管轄ヲ異ニスル者アラハ甲ノ管轄ニ訴フルモ乙ノ管轄ニ訴ルモ其便宜ニ從フ可シ

第八章　連名ノ被告人ヲ訴フル事

第二十五條　負債主連名ノ借用証文ヲ以テ貸渡シタル米金等ノ訴狀連名ノ人數ヲ盡ク相手取ルヘシ

第二十六條　負債主連名中若シ失踪死亡等ニテ相續人ナキ者アラハ連名ノ末ニ其人名ヲ記シ年月日失踪死亡等ノ事ヲ其者ノ管轄戸長某ヨリ承ルト附載スヘシ（附錄第九號ヲ見合ス可シ）

第二十七條　負債主ノ連名中管轄ヲ異ニスル者アラハ甲ノ管轄ニ於テ審判スルヲ願フモ乙ノ管轄ニ於テスルヲ願フモ原告人ノ情願ニ任スヘシ

第九章　讓証文ヲ以テ訴フル事

第二十八條　（本條及ヒ次條ハ但書ヲ除クノ外明治九年七月六日第九十九條布告ニ因テ削ル故ニ略ス）

第二十九條　但外國人ハ其本人ノ國法ニ隨ヒ正シキ權ヲ得ヘシ

第十章　代言人ノ事

第三十條

第三十一條

第三十二條

（本章ハ明治九年二月二十日第十八號布告ヲ以テ刪除ス故ニ之レヲ略ス）

第二卷　被告人ノ答書

第一章　答書ノ定則ノ事

第三十三條　答書ヲ作クルニハ左ノ定則ニ循フヘシ

第一　被告人裁判所ノ呼出狀ト共ニ原告人ノ訴狀ヲ受取ルトキ原告人ノ陳述スル所條理アラハ速ニ熟議シ原告人之ヲ許諾セハ解訟ヲ請フヿヲ衙ヘシ其場合ニ於テハ代書人ヲシテ熟議解訟ノ答書ヲ作ラシメ之ヲ裁判所ニ呈スヘシ（第四十七條及第四十八條ヲ見合スヘシ）

第二　原告人ノ述フル所非理不實ニシテ辨解スヘキ確証アラハ其書類ノ全文ヲ寫載シ次ニ非理不實ノ事ヲ書スヘシ

明治八年
六十三號布告解釋
十六ケ月三十失踪後
内ハ相續人ヲ連帶ノ者ニ加フヘキ位地ノ者ニカラスシテ現ニ在テ負債ノ金額ヲ明治十年三月九年訓示

第三　答書ノ首ニ被告人ノ氏名ヲ記シ住所身分ヲ肩書ニシ答書ノ末ニ年月日ヲ記シ被告人ト代書人トノ氏名連印アルヘシ（附錄第十三號ヲ見合スヘシ）

第四　答書ノ末ニ署スル氏名ハ其本人ノ自筆ヲ用フヘシ若シ本人自署スルヿ能ハサルトキハ其旨ヲ氏名ノ肩ニ記スヘシ

第五　答書ハ十六行ニシテ一行十五字詰ニ認メ正副二通ヲ具スヘシ

第二章　代書人ヲ用フル事

第三十四條　（此章ハ明治七年第七十五號布告ヲ以テ删除ス故ニ略ス）

第三章　代言人ノ事

第三十五條

第三十六條

第三十七條

（此章ハ前卷第十章ト同ク削除ス故ニ略ス）

第四章　原告人ノ返リ証書ヲ所有シタル答書ノ事

第三十八條　負債主米金等ヲ返濟スルニ債主原ノ証書ヲ還附セサルヲ以テ二重ノ催促ヲ爲ス訴訟ハ被告人其答書ニ返リ証文（返リ証文ハ債主ヨリ原ノ証書ヲ還附セシテ其米金受取ノ証書ヲ交付スルヲ云フ）ヲ寫載シ次ニ原告人二重ノ催促ヲ爲シタル旨ヲ書スヘシ

第三十九條　原告人米金等ヲ受取リタルノミノ証書ニシテ貸附ノ米金ヲ受取リタル確証ノ文字ナク又ハ他ノ証據トスヘキ証跡ナキ時ハ其米金ヲ受取タルノミノ証書ヲ以テ返リ証文ト看做スヿヲ得ス

第五章　原告人ヨリ返濟延期ノ約ヲ破リタル答書ノ事

第四十條　借用ノ米金等ヲ返濟スヘキ期限ニ至リ負債主ヨリ債主ニ熟議シテ返濟延期ノ約ヲ結ヒ其証書ニ押印ヲ爲シタル債主ヨリ其約ヲ破リ本証文ニ據リ訴ヘタル答書ハ對談一札（對談一札トハ返濟延期ノ証書ヲ云フ）アルヿヲ記シ次ニ其証書ノ全文ヲ寫載シ次ニ原告人ノ約ヲ破リタルヿヲ書スヘシ

第四十一條　負債主ヨリ返濟延期ノ約ヲ破リタル事件ヨリ起リ債主本証文ニ據リ訴出タル原由アルトキハ負債主ナル者己レヨリ約ヲ破リタル返濟延期ノ証書ヲ以テ原告人破約ノ証ト爲スヿヲ得ス

第六章　原告人証書ヲ僞造シタル答書ノ事

第四十二條　被告人ノ証書ヲ原告人僞造シタル答書ハ其僞造ヲ証スル爲ニ管轄町村ノ役場ニ屆ケ置キタル年月日ノ人別帳ノ寫ヲ記載シ次ニ此人別帳ノ印ト証書ノ印ト相違シタル旨ヲ書スヘシ

第七章　經界ヲ爭フ答書ノ事

第四十三條　國郡鄉村山川田宅等ノ分界ヲ爭フ答書ノ方法ハ第十九條ヲ照スヘシ

第八章　既ニ訴ヘラレタル事件ニ未タ訴ヘサル事件ヲ接續スル事

第四十四條　負債主米金ヲ返濟スヘキ期限ヲ過キテ返濟セサルヲ訴ヘラレタルニ別ニ其債主ヨリ受取ルヘキ米金アリテ其受取ルヘキ期限モ亦過キ未タ訴ヘスト雖ヒ双方均ク返濟ノ約期ヲ破リタルヲ以テ兩件ニ接續シ差引ノ計算ヲ爲サントスル答書ハ負債主ヨリ其別ニ受取ルヘキ米金ノ証書ヲ寫載シ次ニ差引計算ヲ爲スノ旨ヲ書スヘシ

第四十五條　負債主甲某債主乙某ヨリ借用シタル米金ヲ返濟スヘキ期限ヲ過キテ訴ヘラレタルニ答フルニ當リ甲某其借用シタル米金ハ更ニ丙某ニ貸附ケ其期限ヲ過キ返濟セサルヲ以テ既ニ訴ヘラレタル乙某ノ事件ト未タ訴ヘサル丙某ノ事件ヲ接續シテ丙某ノ返濟ヲ爲スヘキ米金ヲ以テ乙某ニ返濟センヿヲ答フルヲ許サス何トナレハ乙ノ貸ス所ノ者甲ニシテ丙ニ非ラス丙ノ借ル所ノ者ハ甲ニシテ乙ニ非ラサルヲ以テナリ

第九章　封決前熟議解訟ヲ爲シタル答書ノ事

第四十六條　被告人訴狀ニ對シ辯解スルヿ能ハサル者ハ速ニ原告人ト熟議シ對決前ニ解訟ヲ爲シタル答書ハ原告人承諾ノ奥印連印ヲ爲サシムヘシ（附錄第十四號ヲ見合スヘシ）

第四十七條　前條ノ場合ニテ貸借淹滯ノ訴ニ起ル解訟ノ答書ハ償ノ既濟又ハ未濟ト雖ヒ更ニ延期ノ約ヲ結ヒタル等ハ前條ニ照ス可シ各種違約ノ訴訟ハ原被双方ノ熟和ニ至リ又ハ更ニ改定ノ定約ヲ立テタル等モ亦前條ニ照スヘシ

第十章　對決前返濟延期ノ約定ヲ爲シタル答書ノ事

第四十八條　原被告人對決審判前ニ被告人ヨリ負債ヲ返濟スルノ延期ヲ請ヒ原告人之ヲ承諾シ其審判ヲ仰カス延期ノ日ニ至リ完ク返濟スルノ後解訟ノ証書ヲ呈セントスル者ハ其答書ニ延期ノ旨趣ヲ書シテ原告人承諾ノ奥書連印ヲ爲サシムヘシ（附錄第十五號ヲ見合ス可シ）

第十一章　對決前親戚又ハ朋友ヨリ代償ノ延期ヲ約シテ解訟ヲ爲シタル答書ノ事

第四十九條　原被告人對決審判前ニ被告人ノ親戚又ハ朋友ヨリ被告人ノ負債ヲ延期代償センヿヲ請ヒ原告人之ヲ承諾セハ熟議解訟ノ答書ニ其延期代償ノ旨趣ヲ書シ代償人及原告人ノ奥書連印ヲ爲サシムヘシ（附錄第十六號ヲ見合スヘシ）

第十二章　對決前親戚又ハ朋友ヨリ代償延期ノ約定ヲ爲シタル答書ノ事

第五十條　被告人對決審判前ニ被告人ノ親戚又ハ朋友ヨリ被告人ノ負債ヲ延期代償センヿヲ請ヒ原告人之ヲ承諾シテ其審判ヲ仰カス延期ノ日ニ至リ完ク返濟スルノ後解訟ノ証書ヲ呈セントスル者ハ其答書ニ延期代償ノ旨趣ヲ書シ代償人及ヒ原告人ノ奥書連印ヲ爲サシムヘシ（附錄第十七號ヲ見合スヘシ）

訴狀表紙ノ式（美濃紙大半紙又ハ右寸法ニ同シキ紙ヲ用ユヘシ）

年月日

某訴狀

住所
身分
氏名

某訴狀トハ假令ハ貸金ノ淹滯ヲ訴フルハ貸金催促ノ訴狀ト記シ流質地ノ爭訟ハ流質地引渡催促ノ訴狀ト記スノ類

訴狀ノ式

某訴

住所
身分
原告人
氏名

住所

標記云々

右原告人氏名申上候私儀云々

年月日

某御裁判所

被告人
身分
氏名

住所
氏名印

代書人
身分
氏名印

○明治六年九月七日

第三百十二號

訴答文例附錄中訴狀宛所某御裁判所ト有之處毎號トモ同第十八號書式ノ通リ相定メ候條此旨更ニ布告候事

第二號

貸金催促ノ訴狀

貸金催促ノ訴

住所
身分
原告人　氏　名

住所
身分
被告人　氏　名

一元金何圓（年月日貸附　年月日期限）
一利金何圓　一年又ハ一月幾分ノ利
合何圓
右証文ノ寫左ノ如シ
借用証文
一金何圓
右云々

貸主　氏　名
証人　氏　名

住所
身分
氏　名印

住所
身分
代書人　氏　名印

右原告人氏名申上候云々

年月日

某　御裁判所

第三號

賣掛代金滯ノ訴狀

賣掛代金滯ノ訴

原告人　住所
　　身分
　　氏　名

被告人　住所
　　身分
　　氏　名

一金何圓

右賣掛帳ノ總計高ニ御座候

但帳面ニ被告人ノ証印有之候

若シ賣掛帳ニアラスシテ証文ナレハ其証文全文ノ寫ヲ出スヘシ

右原告人氏名申上候云々

年　月　日

氏　名印

第四號

買附米引渡違約ノ訴狀

某　御裁判所

代書人　住所
　　身分
　　氏　名印

買附米引渡違約ノ訴

原告人　住所
　　身分
　　氏　名

被告人　住所
　　身分
　　氏　名

一米何石（年月日買取約定滯此度受取ルヘキ石高）

代金何圓（一石ニ付何圓換）
内何圓　年月日手付金トシテ渡濟
　　年月日限現米引替ニ渡スヘキ約定
殘何圓
右約定証書ノ寫左ノ如シ
証書云々
右原告人氏名申上候云々
年月日

住所
身分　代書人
氏　名印

某
御裁判所

第五號

賣附生絲代金引渡違約ノ訴狀

住所
原告人　身分
氏　名

住所
被告人　身分
氏　名

賣附生糸代金引渡違約ノ訴

一金何圓（年月日限生糸引替ニテ受取ルヘキ殘金高）
元金何圓（年月日生糸何斤賣附約定ノ金高）
　但何斤ニ付何圓替
内何圓（年月日手附トシテ受取濟）
右約定證ノ寫左ノ如シ
証書云々
右原告人氏名申上候云々
年月日

住所
氏　名印

第六號

妻離別ノ訴狀

某
御裁判所

代書人　身分
氏　名印

妻離別ノ訴

夫　氏名　當何歳
妻　氏名　當何歳　年月日娶ル

原告人　住所
身分
氏　名

被告人　住所
身分
氏　名

第七號

經界ヲ爭フ繪圖ノ式

某御役所ニ差出置候年月日ノ戸籍人別帳ノ寫左ノ如シ
人別帳
右原告人氏名申上候云々
年月日

前書申上候處相違無御座候

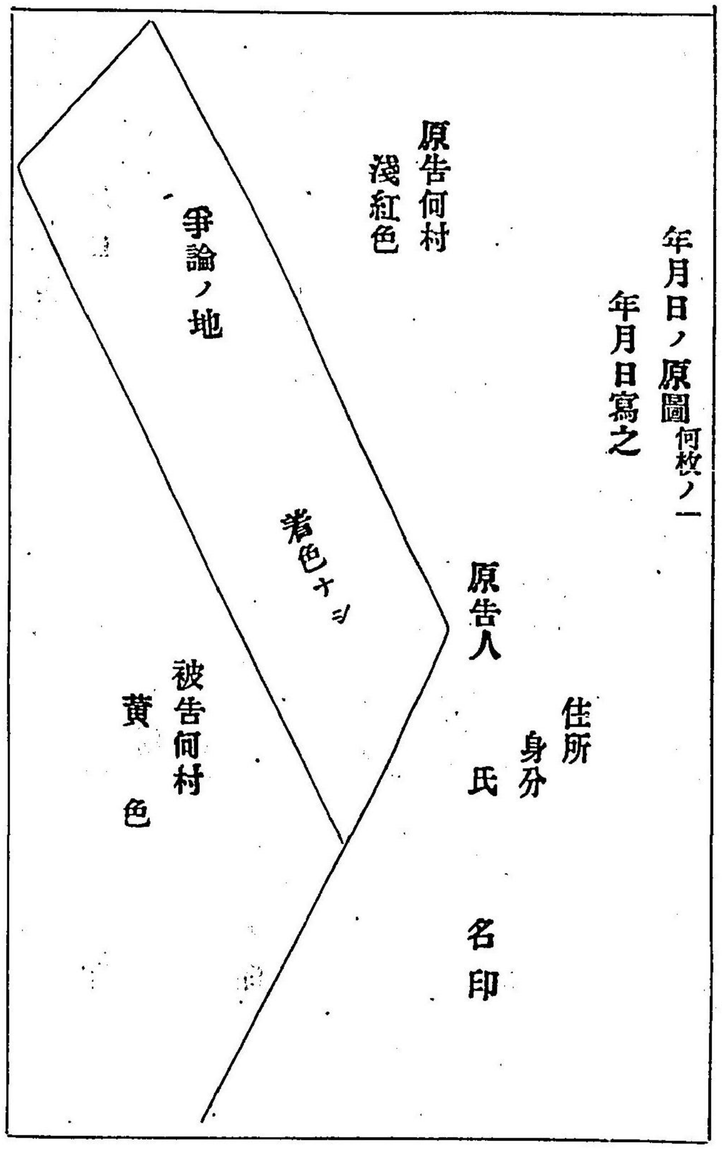
年月日

某　氏　名印
住所
身分
代書人　氏　名印
住所
身分
原告人ノ祖父母父母等　氏　名印
氏　名印

御裁判所

第八號

年月日ノ原圖何枚ノ一
年月日寫之



原告人　住所
身分
氏　名印

原告人三人以上ナルヲ一人ニ任スル訴狀

第九號

某ノ訴

原告人　住所
身分
氏　名

被告人　住所
身分
氏　名

代書人　住所
身分
氏　名印

標記云々
右原告人氏名申上候云々
年　月　日

前書ノ儀原告私共連名ニテ御願可申筈ニ御坐候處病氣云々ニ付難罷出ニ付何ノ誰ヘ總代相頼候然ル上ハ何ノ誰ヨリ申上候事柄並ニ御受仕候事柄共後日ニ至リ私共ヨリ異議申上間敷候爲後証奥印仕候

第九號

年月日

某

御裁判所

住所
身分
氏　名印

住所
身分
氏　名印

住所
身分
氏　名印

代書人

被告人連名中脫走又ハ病死人アルノ訴狀

住所
身分

某ノ訴

原告人　氏　名

住所
身分
被告人　氏　名

元住所
身分
被告人　氏　名

右何ノ誰ハ年月日脫走致候段何町村役人何ノ誰ヨリ承知仕候

住所
身分
被告人　氏　名

右何ノ誰ハ年月日死亡致候段何町村役何ノ誰ヨリ承知仕候

右原告人氏名申上候云々

年月日

某　氏　名印

御裁判所　住所

身分

代書人　氏　名印

第十號

讓証文ヲ以テ催促スル訴狀（此一號ハ明治九年第九十九號布告ヲ以テ消滅ス故ニ略ス）

第十一號

代言人ヲ頼ム訴狀

第十二號

一時假リノ代言人ヲ出ス証書

（右兩號ハ明治九年第十八號布告ニ因テ消滅ス故ニ略ス）

第十三號

答書表紙ノ式（用紙寸法第一號訴狀ノ法ノ如シ）

年月日

某ノ答書　住所

身分

氏　名

答書ノ式

某ノ答書　住所

右住所身分何ノ誰何々儀訴出候ニ付今日御呼出之御狀拜見仕御答申上候私儀云々

證據ノ書類アラハ其寫ヲ記載スヘシ

右之通御座候

年月日　氏　名印

被告人　氏　名

第十四號

對決前熟議解訟ノ答書

某

御裁判所

住所
身分
代書人　氏　名印

某ノ訴濟口ノ答

右住所身分何ノ誰何々ノ儀訴出候ニ付今何日御呼出之御狀拜見仕原告人
ヘ熟談濟方仕候趣申上候
私儀云々
年月日

住所
身分
被告人　氏　名印

氏　名印

第十五號

對決前返濟延期ノ約定ヲ爲シタル答書

前書被告人何ノ誰ヨリ申上候通熟談濟方仕候ニ付此上對決ノ御裁斷不願
奉候

住所
身分
代書人　氏　名印

年月日

住所
身分
原告人　氏　名印

某

住所
身分
代書人　氏　名印

御裁判所

某ノ訴濟口日延ノ答

右住所身分何ノ誰何々ノ儀訴出候ニ付今何日御呼出ノ御狀拜見仕原告人
へ熟談ノ上濟方日延約定仕候段左ノ通リ御座候

私儀云々

年月日

住所
身分
氏　名印

被告人
住所
身分
氏　名印

代書人
氏　名印

前書被告人何之誰申上候通熟談ノ上濟方日延約定仕候ニ付來何年何月何日マテ御裁斷御猶豫奉願候

年月日

住所
身分
原告人　氏　名印

第十六號

對決前他人代償ノ延期ヲ約シタル解訟ノ答書

某　御裁判所

住所
身分
代書人　氏名印

某ノ訴何之誰ヨリ日延代償ニテ濟口之答

右住所身分何之誰何々之儀訴出候ニ付今何日御呼出之御狀拜見仕原告人
へ熟談ノ上親族朋友中何ノ誰ヨリ日延代償約定仕候段左ノ通リ御坐候

私儀云々

年月日

住所
身分
被告人　氏　名印

前書被告人何ノ誰申上候通リ私共ヨリ日延代償ノ約定仕候段相違無御座候

年月日

住所
身分
代書人　氏　名印

住所
身分
代償人　氏　名印

住所
身分
代書人　氏　名印

前書被告人何ノ誰申上候通私共承諾仕候ニ付此上對決ノ御裁斷不奉願候

年月日

住所
身分
原告人　氏　名印

住所

第十七號

對決前他人代償ノ延期ヲ約シタル答書

某

御裁判所

代書人　身分　氏　名印

某ノ訴何之誰代償濟ロ日延ノ答

住所
身分
被告人　氏　名

右住所身分何之誰何々ノ儀訴出候ニ付今何日御呼出ノ御狀拜見仕原告人
〜熟談之上親族朋友中何之誰ヨリ代償濟方日延ノ約定仕候段左ノ通御座候

年月日

住所
身分
氏　名印

前書被告人何之誰申上候通私共ヨリ代價濟方日延ノ約定仕候段相違無御座候

年月日

代書人　氏　名印

代償人　住所　身分　氏　名印

代書人　住所　身分　氏　名印

前書被告人何之誰申上候通熟談ノ上何ノ誰ヨリ代償濟方日延約定仕候ニ付來何年何月何日迄御裁斷御猶豫奉願候

年月日

原告人　住所　身分　氏　名印

代書人　住所　身分　氏　名印

第十八號

外國原告人ノ訴狀

某　御裁判所

本國住所　身分　原告人　氏　名

訴狀

住所　身分　被告人　氏　名

右原告人氏名ヨリ右被告人氏名ニ對シ當御裁判所ヘ左ノ通訴訟申上候

第一云々

第二云々

但シ訴訟ノ根源事實ノ大略ヲ明白ニ認ムヘシ若其事實混交シテ

第三云々

依之原告ヨリ御裁判所ヘ云々被成下度願上候事

長文ナルトキハ第一第二第三條ト之ヲ區別スヘシ

但シ何等ノ處置ハ原告人ノ所願ニ候ヤ金子ノ拂カ其金高何程カ右判然ト認メ其他公正ノ御裁判ヲ願ノ趣ヲ認ムヘシ

日本地名
年月日

原告人　氏名花押

若シ原告ノ代言者ナルトキハ左ノ如ク加判スヘシ

代言者　氏名花押

某
裁判所長
氏名

(五)訴答文例ハ當分御國人而已遵守(明治六年十月十日第三百三十九號布告)

本年七月第二百四十七號布告訴答文例ハ詮議ノ次第モ有之當分御國人ノミ遵守候義ト可相心得此旨布告候事

(六)訴訟入費償却規則(明治九年四月二十二日司法省甲第五號布告)

字數行數十七年甲第一號ヲ以テ改正

第一條　訴訟幷其外書類認料

右定限

第一　原告人ノ訴狀ノ正本副本

第二　被告人ノ答書ノ正本副本

第三　訴狀又ハ答書中ニ記載シ難キ証據書類ノ寫

第四　審判中ニ原告又ハ被告ヨリ差出シタル証據書類ノ寫

第五　訴訟中訴狀ニ關係スルノ事件ニ付原被双方往復ノ文書

右定限

第二條　証人並引合人手當　一日ニ付五十錢

但八里以外ヨリ罷出止宿ノ者ハ二十五錢ヲ增ス

九年司法省甲第六號ヲ以テ達スル迄施行ニ不及旨ヲ布達ス

裁判所ニ出席ヲ爲シタル日

第三條　証人並引合人滿八里以外ノ地ヨリ來リ滯留中ノ手當　一日ニ付五十錢

第四條　証人並引合人旅費　滿八里ニ付十錢歸路モ同斷

但八里ヲ越レハ每滿一里ニ付十錢

右定限

第一　兩線ノ官道甲路ハ遠ク乙路ハ近キトキハ現ニ甲路ヲ經ルト雖モ乙路ヲ以テ計筭スヘシ

第二　本條ハ日本國管内ヲ通行スルモノヽ爲メ設ク

第五條　原告又ハ被告人直ナル者ノ手當一日ニ付五十錢

但八里外ヨリ罷出止宿スル者ハ廿五錢ヲ增ス

右定限

同前

第二條ニ同シ

第六條　原告人又ハ被告人直ナル者八里以外ノ地ヨリ來リ滯留中ノ手當　一日ニ付五十錢

第七條　原告人又ハ被告人直ナル者旅費滿八里ニ付十錢歸路モ同斷

但八里ヲ越レハ每滿一里ニ付十錢

右定限

第四條ニ同シ

第八條　通辨雇料　一日ニ付三圓

右定限

第二條ニ同シ往復旅費ヲモ定額ノ通計筭スヘシ

第九條　枚數行數共十七年甲第一號ヲ以テ改正

右定限

第一條ニ同シ

第十條　測量繪圖認料

右定限

第一　長三百間ニテ盡ルトキハ百間ニ付一尺ノ割西ノ内一枚ニ付十錢

第二　長六百間迄百間ニ付五寸ノ割　同十二錢

第三　長千三百間迄百間ニ付三寸ノ割　同十四錢

第四　長六千間迄百間ニ付二寸ノ割　同十七錢

第五　長一万二千間迄百間ニ付一寸ノ割　同二十錢

第六　長二万二千間以上百間ニ付五分ノ割　同廿四錢

一　測量ニ及サル見取繪圖ハ間數ノ長短ヲ論セス大凡見積ヲ以テ簡便ニ圖引致スヘシ但西ノ内一枚ニ付十錢

第十一條　使賃　明治十四年司法省丁第廿六號發布ニテ消滅

第十二條　郵便並電信料　定價

第十三條　身代限ヲ爲スニ付裁判所又ハ縣廳又ハ町村役場ニ納ムヘキ評價人監定人等ノ日雇賃金ノ諸入費及身代限諸雜費ハ臨時計算ヲ以テ定ム

右ハ前數條ノ入費ニ先ツテ取立ツヘシ

○明治十七年三月五日司法省甲第一號告示

今般第五號布告ヲ以テ訴訟用罫紙規則發セラレ候ニ付テハ本年四月一日以後民事訴訟ニ關シ大審院又ハ裁判所ヘ差出ス書類ハ都テ美濃紙又ハ之ト同尺度ノ紙ヲ用ヒ一枚二十四行一行二十字詰ニ書スヘキモノトス

但訴訟入費ハ明治九年當省甲第五號布達第一條第九條ニ定メタル割合ニ依リ書類認料ハ一枚金二十錢飜譯料ハ一枚金四圓ト相成ル儀ト心得ヘシ

○明治十一年一月七日司法省丁第一號達

明治九年四月甲第五號ヲ以テ訴訟入費償却規則布達候處右ハ爾後各國公使ヘ談判ノ次第モ有之ニ付當分外國人民ヘハ施行難相成候條此旨可相心得候事

但各國ノ內已ニ該規則ノ通準行致シ來候分ハ此限ニ非ス

(七)訴訟費用負擔方(明治十二年三月十四日司法省丁第十號達)

裁判費訴訟費ノ儀ニ付別紙ノ通大審院ヘ相達候條此旨爲心得相達候事

別紙

第一例

初告ニテ被告(原告甲勝乙負)(乙)入費ヲ拂

控訴ニテ被告(原告乙勝甲負)(甲)ハ初告控訴兩件ノ入費ヲ拂フ

破毀セス上告ニテ被告(原告甲負乙勝)(甲)ハ總テノ入費ヲ拂フ

第二例

初告ニテ甲勝或ハ負トモ乙負或ハ勝トモ

控訴ニテ乙勝甲負甲ハ初告控訴入費ヲ拂フ

破毀セス上告ニテ乙勝甲負ハ上告入費ヲ拂フ而シテ甲ハ控訴マテノ乙ノ入費ヲ既ニ償ヒシナラハ取返スヘシ

第三例此例ハ大審院ニ於テ破毀シタル後ハ二ノ上等裁判所ニ移シタル場合ナリ

此時負者ハ初告ト第一控訴ト第二控訴ト都合三件ノ入費ヲ拂フヘシ上告入費ニ至テハ又其上告ノ負者之ヲ拂ヒ第二控訴ノ負者ハ之ヲ拂フヘキニ非ス

〔ツ〕(八)追訴書式(明治十七年二月廿九日兵庫縣ヨリ司法省ヘ伺定)

官金拜借主他債ノ爲メ身代限ノ處分ヲ受ヶル者追訴ノ儀ニ付明治十五年二月四日太政官第十二號御達有之候處右第一項用紙ハ通常公文用紙ニナスト雖ヒ其書式ハ從前ノ通訴答文例ニ據リ可認儀ト被存候得共爲念此段相伺候也

司法省指令　追訴ノ儀ニ付伺ノ趣ハ訴答文例ニ據ルヲ要セス　明治十七年三月十日

〔十〕(九)內外人交涉訴訟(明治八年五月七日司法省甲第三號布達)

內國人ヨリ外國人ヘ係ル民事ノ訴訟手續左ノ通相定候條此旨布達候事

內國人原告ニテ外國人ニ係ル民事ノ訴訟ハ原告人其事由ヲ各開港開市場ノ府縣廳ニ申出其廳ノ添狀ヲ得テ被告人管轄ノ各國領事ヘ申訴スヘシ

〔ム〕(一〇)無年期貸付金穀裁判期限(明治六年一月十三日第十號布告)

金穀貸附証文ノ內返濟期限無之歟又ハ出來次第返却可致等ノ証書取置後日訴出ツルニ於テハ裁判申渡ヨリ十二ヶ月ノ內濟方可申付事

但從前今後共無年期貸付中內証屬返濟ヲ促スト雖ヒ滿五年ニ至ル迄一度モ不訴出者ハ裁判ニ不及候尤土地家屋等ノ貸賃ハ不動產ニ屬スル儀ニ付滿五年ヲ過クルト雖ヒ可及裁判事

〔ク〕(一一)勸解中出訴期限滿期ノ者處置方(明治九年四月十七日司法省第四十四號達)

區裁判所「或ハ裁判所支廳」ニ勸解出願中出訴期限滿期ノ者處置方左ノ通可相心得

第一條　勸解出願ノ者勸解中ニ出訴期限ノ滿期ニ至ル者ハ其勸解不調ノ翌日ヨリ滿三十日迄ハ出訴期限ノ猶豫ヲ與フヘシ

第二條　勸解調ハサルトキ右滿三十日迄ニ裁判所ニ出訴ヲ爲サヽルニ於テハ其事件ニ付出訴スルノ權利ヲ拋棄シタルモノト見做スヘシ

(一二)課稅ニ關スル處分ニ付出訴方(明治十五年五月十日第廿二號布告)

課稅ニ關スル處分ニ付不服アリテ出訴セントスルモノハ先ツ其旨ヲ申立課額ヲ上納シ領收証書ヲ添ヘ其翌日ヨリ六十日以內ニ訴出ツヘシ但納稅期限前ニ訴出テ訴訟中ト雖モ其期限ニ至レハ課額ヲ上納スヘシ

(一三)區町村會ニ於テ評決ノ區町村出訴方(明治十七年七月四日第廿三號布告)

區町村會ニ於テ評決シタル區町村費ニ關シ不服アリテ出訴セントスルモノハ都テ明治十五年五月第廿二號布告ニ依ルヘシ

內外人交涉訴訟　無年期貸付金穀裁判期限　勸解中出訴期限滿期ノ者處置方
課稅ニ關スル處分ニ付出訴方　區町村會ニ於テ評決ノ區町村出訴方

〔フ〕(一四)負債者失踪後ノ訴訟(明治八年一月二十日第六號布告)

民法裁判上負債者失踪後ノ訴訟ハ失踪後三十六ヶ月ノ時間ハ採上ケサル成例ニ有之候處本年三月一日ヨリ以後ハ左ノ通相改メ候條此旨布告候事

第一條　債主定約期限未滿內ニ負債者ノ失踪ヲ知ルトキハ定約滿期ニ至リ直ニ裁判所ヘ訴出ツ可キ事

第二條　債主未タ負債者ノ失踪ヲ知ラス定約滿期又ハ出訴期限將ニ盡ントスルヲ以テ裁判所ヘ出訴シ裁判所ノ奥書ヲ以負債者ニ掛合始テ其失踪ノ事ヲ知ルトキハ右奥書訴狀ヲ再呈シ其旨屆ケ出ツヘキ事

第三條　前條々ノ場合裁判所ニ於テハ一應訴狀採上ケ直ニ失踪ノ年月日ヲ訊問ヤタル上債主差出シタル証書ニ負債者何年何月何日家出ノ末行衛相分ラサルニ付追テ本人見當ルカ又ハ三十六ヶ月ノ滿月後跡相續ヲ爲スヘキ者ニ掛リ此裏書証書ヲ以テ再訴致スヘキ旨ヲ記載シ訴狀下戻スヘキ事

第四條　債主於テ前條ノ裏書証書ヲ受取置キタル上ハ本人見當リ又ハ捜索三十六ヶ月ノ時限ハ明治六年十一月第三百六十二號布告出訴期限ノ限內ニハ加筭致サヽル事

〔コ〕(一五)公賣處分(明治七年三月廿日第三十四號達)

從前布告中裁判上入札又ハ糶賣ノ定メ有之候處右處分ノ儀各地方ノ便宜ニ隨ヒ裁判官見込ヲ以テ兩樣ノ內取計ヒ苦シカラス此旨相達候事

(一六)行政裁判(明治七年九月二日第廿四號達)

今般人民ヨリ院省使府縣ニ對スル訴訟取扱ニ付假規則別冊ノ通相設ケ候間右ニ準據可致候條此旨相達候事

人民ヨリ院省使府縣ニ對スル訴訟仮規則

第一條　凡人民ヨリ院省使府縣ニ對シ一般公同ニアラサル人民一個ノ訴訟ハ司法省ニ於テ受理スヘシ其事件左ノ如シ

但闔區內又ハ幾個ノ人民共有ノ物及會社等ハ一個ノ人ト看做スヘシ

一　院省使府縣所有ノ土地ニ關シタル事

一　院省使府縣ノ會計及ヒ金銀貸借ニ關シタル事

一　官府ノ管轄スル建造物等ニ關シタル事

第二條　訴訟事件ニ付テ被告タル院省使府縣ハ其長官ヨリ其代人ヲ撰ミ差出スヿヲ得ヘシ其代人ノ外更ニ事件ノ証ヲ取ル爲メ主務ノ官吏ノ呼出サヽルヲ得サルトキハ其本人ヲ呼出

スコトモアルベシ

但奏任以上ニ係ル者ハ奏請ヲ經テ區處スル事

第三條　裁判上院省使府縣ヨリ人民ヘ對シ償還スヘキ條理アルトキハ其事由及ヒ裁判ノ見込ヲ具狀申稟スル可シ

若シ主務ノ官吏一已ノ失錯ニ出テ其者ヨリ償還スル可キハ具狀申稟スルニ及ハスト雖トモ事情止ヲ得サル場合ニテ院省使府縣ヨリ償還セサルコトヲ得サルトキハ具狀申稟スルコト前項ニ同シ

但具狀申稟ヲ經テ裁決スル者ハ之ヲ始審トシ更ニ控告スルコトヲ得スト雖トモ

第四條　右ニ記載シタル場合ノ外人民一個ノ事ニアラサル一般公同ノ爲メニ起ル訴訟ニテ行政裁判ニ帰スル者ト雖トモ當今其設置ナキヲ以テ之ヲ訴ル者アルトキハ先以テ之ヲ具狀申稟シテ正院ノ指圖ヲ乞フヘシ

一　官ノ會計ニ付一般ノ人民ニ關スル事

一　道路ヲ作ルコトニ付一般ノ人民ニ關スル事

一　工部ノ製造建築ニ付一般ノ人民ニ關スル事

一　此官廳ト彼官廳トノ間ニ起ル權限ノ事

一　行政官ト司法官トノ間ニ起ル權限ノ事

但右ノ裁判ニ付テノ手續ハ第二條第三條ニ同シ

○明治八年五月廿九日司法省甲第五號布達

各人民ヨリ院省使府縣等ニ對スル訴訟ハ當分各上等裁判所ニ於テ受理候條此旨布達候事

○明治十四年八月五日司法省甲第四號達

從來人民ヨリ郡區長及ヒ戸長ノ職務上ニ對スル詞訟ハ各上等裁判所ニ於テ受理審判致シ候處自今地方裁判所ニ於テ受理審判候條此旨布達候事

但受理審判等ノ手續ハ是迄各上等裁判所ニ於テ取扱ヒ來リ候振合ニ可準候事

○明治十四年八月五日司法省丁第九號達

地方裁判所

人民ヨリ郡區戸長ニ對スル詞訟取扱方今般甲第四號ヲ以テ布達候ニ付テハ是迄上等裁判所並ニ大審院ヘ相達置候諸達書別紙六通回付候條此旨相心得ヘキ事

別紙

第五號

各上等裁判所

人民ヨリ院省使府縣ニ對スル訴訟ニ付明治七年第二十四號ヲ以テ相達置候處右ハ行政司法ノ裁判權限ニ於テ猶混淆ヲ免カレサレ儀モ有之候ニ付追テ御規則相立候迄右ニ關スル訴訟ハ總テ本省ヘ伺出指令濟ノ上受理可致候此旨相達候事

明治九年一月二十二日

大審院
各上等裁判所

丁第二十四號

行政裁判云々ノ儀本年五月八日丁第十三號ヲ以テ相達候處右ハ取消候條自今行政裁判ニ屬スル分ハ官府ヨリ償還スヘキ條理アルト否トニ拘ハラス總テ裁判見込案ヲ以テ具上申裏ヘキ儀ト可心得事

但司法裁判ニ屬スル者ハ七年第廿四號當省達第三條ノ通タルヘキ事

明治十一年六月二十九日

番外達

大審院
各上等裁判所

官廳ヲ相手取リ訴ヘ出ルモノハ從前政府トノミ相認ル節ハ官衙ヲ指定シ候樣可爲致此旨相達候事

明治十一年十一月六日

番外達

人民ヨリ院省使府縣ニ對スル訴訟ニ付伺書差出候節該件訴狀或ハ判決案等正本一通差出候向有之候處自今都テ寫一通相添ヘ可差出候此旨相達候事

明治十二年五月二十七日

各上等裁判所

丁第十五號

人民ヨリ院省使等ニ係ル訴訟ニ付指令濟審理中解訟致シ候モノ又ハ司法裁判ニ皈シ官府ノ勝訴訟トナリシモノ有之節ハ其都度可屆出此旨相達候事

但既ニ本文ノ件アリテ未タ屆出サルモノハ取纏メ屆出ツヘシ

明治十二年六月十四日

各上等裁判所

丁第十九號

人民ヨリ院省使府縣等ニ對スル詞訟ニシテ太政官ノ裁令ヲ經テ裁決セシムルモノハ自今本省ヨリ其旨ヲ附記シテ指令ニ及候條其裁判所ニ於テモ右申渡ヲ爲セシ時ハ其都度其趣（何某ヨリ何某ニ係ル何々ノ件ハ何年何月何日太政官ノ裁令ヲ經テ裁決セシ旨ヲ記ス）大審院ヘ通報ニ及置クヘシ此旨相達候事

但本文ノ件ニ付テハ本人不服ヲ唱ヘ上告ノ屆ヲ差出スモ別ニ大審院ヘ書類遞送スルニ及ハス候事

明治十二年七月二十九日

○明治十五年三月一日司法省丁第十五號達

人民ヨリ郡區戸長ニ對スル詞訟取扱方ノ義ニ付昨明治十四年丁第九號達モ有之候處受否又ハ判決案伺出ノ際往々不都合ノ向モ有之候條右伺出ノ節ハ原被告ヨリ差出シタル訴答書ハ勿論一切ノ書類正本一通及ヒ謄寫ノ副本一通合セテ二通並ニ判決案モ正副二通相添ヘ可差

出儀ト可心得此旨相達候事

○明治十五年四月十四日

丁第二十五號人民ヨリ郡區戸長ニ對スル詞訟取扱方ノ儀昨明治十四年丁第九號ヲ以テ相達候中明治十二年丁第十九號各上等裁判所ヘノ達ニ（前略）右申渡ヲ爲セシ時ハ其都度其趣（何某ヨリ太政官ノ裁令ヲ經テ裁決セシ旨ヲ記ス）大審院ヘ通報ニ及置クヘキ旨有之右ハ自今此達ニ照準シ管轄控訴裁判所ヘモ其都度無遺漏可及通報此旨相達候事

○右同日控訴裁判所ヘ達

丁第廿六號

別紙ノ通始審裁判所及ヒ始審裁判所ノ權限ヲ有スル治安裁判所ニ相達候條本人控訴ノ節ハ右ニテ受理不受理ノ義識別可致此旨爲心得相達候事

別紙（即チ丁第二十五號ニシテ前ニ出スヲ以テ之ヲ略ス）

○明治十五年九月廿六日

丁第四十九號

官府ヨリ人民ニ對スル詞訟ノ控訴受否伺ノ儀ニ付別紙ノ通名古屋控訴裁判所ヨリ伺出テ朱書ノ通及指令候條爲心得此旨相達候事

伺本文達ト抵觸セル從前ノ指令內訓ハ取消ス

別紙

人民ヨリ院省府縣等ヲ控訴被告トシ覆審ヲ需ムル控訴受理不受理ハ伺ヲ經ヘキヤ否ヤノ儀ニ付伺

人民ヨリ院省府縣ニ對スル訴訟ハ明治九年一月第五號御達ニ依リ總テ本省ヘ伺出御指令ヲ待ツ受理致シ候儀ハ勿論ニ候處爰ニ初發院省府縣等ヨリ人民ヲ被告トシテ始審裁判所ヘ起訴シタル詞訟其始審裁判所ニ於テ之ヲ受理裁判シタル處該裁判ニ對シ不服ノ旨ヲ以テ人民（始審ノ被告ニシテ即チ始審裁判ノ曲者）ヨリ院省府縣（始審ノ原告ニシテ即チ始審裁判ノ直者）ヲ控訴被告ト爲シ控訴スルトキハ伺ホ前顯御達ニ準據シ經伺ノ上受理スヘキモノニ可有之哉此段相伺候條至急仰御指令候也

明治十五年八月廿九日　　名古屋控訴裁判所長

判事小畑美稻代理

判事　堤　正己

朱書

伺ノ趣經伺ニ及ハサル儀ト心得ベシ

司法卿大木喬任殿

（一七）控訴上告手續（明治十年二月十九日第十九號布告）

第一章　控訴ノ事

第一條　凡ソ地方裁判所ノ初審ニ服セスシテ再ヒ上等裁判所ニ訴ヘ覆審ヲ求ムル者之ヲ控訴ト云フ

第二條　控訴ハ民事ニ止マリ刑事ニ及ハス（本條ハ治罪法實施以後ハ自然ニ消滅ニ歸シタルモノナリ）

第三條　控訴ハ一タヒスルヿヲ得再ヒスルヿヲ得ス

第四條　地方裁判所ニ於テ裁判ノ言渡ヲ爲シタル時原告被告ノ双方又ハ一方ノ者其裁判ニ不服ナル時ハ裁判言渡ヨリ第七日マテニ（裁判言渡ノ翌日ヨリ數フ）裁判言渡ノ事理ヲ熟考シ其翌日ニ至リ控訴スルヿヲ得可シ但シ訴訟ノ案件商事ニ係リ急速ニ控訴スルヿヲ要スルノ場合ニ於テハ七日内ト雖モ控訴スルヿヲ得

第五條（明治十五年四月二十六日第二十一號布告ヲ以テ本條中三ヶ月トアルハ總テ二ヶ月ト改正ス）

地方裁判所ノ裁判言渡ヨリ二ヶ月（三十日ヲ以テ一月トス）ヲ過クル時ハ控訴スルヿヲ許サス但シ地方裁判所ヨリ上等裁判所ニ至ルノ距離八里ヨリ遠キ時ハ期限二ヶ月ノ外八里毎ニ一日ヲ猶豫ヲ增スヘシ

第六條　控訴ヲ爲ス者ハ其初審ヲ受ケタル地方裁判所ニ屆ケ出ルヘシ但シ添翰ヲ乞フニ及ハス

第七條　前條ノ屆ヲ受取リタル地方裁判所ハ裁判言渡ノ執行ヲ停止スヘシ若シ上等裁判所ノ請求アル時ハ地方裁判所ニ於テノ訴狀答書口書裁判見込等ヲ差出スヘシ

第八條　裁判所ニ捧クルノ訴狀ハ訴答文例ニ照準スヘシ

第二章　上告總則ノ事

第九條　各裁判所ノ終審ヲ不法ナリトシ大審院ニ向テ取消ヲ求ムル者之ヲ上告ト云フ

第十條　上告スルヿヲ得ルノ事件ハ

第一　裁判所管理ノ權限ヲ越ユ

第二　聽斷ノ定規ニ乖ク

第三　裁判法律ニ違フ

第十一條　大審院ハ上告ヲ受クルノ所ニシテ控訴ヲ受クルノ所ニアラス故ニ控訴スヘキノ事ヲ以テ誤テ上告スル者アルモ之ヲ斥ケテ理セス

第十二條　陸海軍ノ裁判權限ヲ越ル者ハ之ヲ大審院ニ上告スルヿヲ得

第十三條　凡ソ上告シタル者己ニ大審院ノ判決ヲ經レハ更ニ訴フルヿヲ得ス

第三章　民事上告ノ事

第十四條　民事ノ上告スルヿヲ得ル者ハ己ニ上等裁判所ニ控訴シ其審判ヲ經タル者ニ限ル

第十五條　上告ヲ爲サント欲スル者ハ裁判言渡ヨリ二月内ニ上告狀ヲ大審院ニ捧クヘシ而

シテ同時被告人ニ通知スルヲ要ス若シ原裁判所ヨリ大審院ニ至ルノ距離八里ヨリ遠キ時ハ二月ノ外八里毎ニ一日ヲ增ス此定期ヲ過クレハ上告スルヲ許サス

上告狀中ニハ必ス左ノ事實ヲ記載スヘシ

第一　原告人ノ住所身分氏名

第二　代言人アレハ其住所身分氏名

第三　被告人ノ住所身分氏名

第四　証人又ハ引合人アレハ其住所身分氏名

第五　地方裁判所ニ出訴シ又ハ被告ニテ呼出サレタル年月日及ヒ裁判言渡ヲ受ケタル年月日

第六　上等裁判所ニ控訴シ又ハ被告ニテ呼出サレタル年月日及ヒ裁判言渡ヲ受ケタル年月日

上告狀ハ正本一冊及ヒ副本五冊ヲ差出スヘシ

上告狀ニハ必ス左ノ書類ヲ添ヘ屆出スヘシ

第一　地方裁判所ニ於テノ訴狀幷ニ答書ノ寫及裁判言渡書ノ寫

第二　上等裁判所ニ於テノ訴狀幷ニ答書ノ寫及裁判言渡書ノ寫

第三　上告狀中ニ憑據トナス書類ノ寫ノ各書類ニ番號ヲ朱書シ編ノ一冊ト爲シ又ハ葉數多ニ付編シテ幾冊ト爲シタル者

右之訴狀又ハ答書及ヒ憑據ノ書類ノ寫ヲ所持セサル者ハ原裁判所ニ出願シ裁判所ノ簿冊ヲ訟廷ニ取下ケ見座ノ目前ニ於テ之ヲ寫シ取ルヿヲ得ヘシ

若シ原裁判所ニ於テ書類寫取ノ出願ヲ許サヽルニ因リ上告人其寫ヲ出シ能ハサルトキハ其旨ヲ上告狀中ニ記載スヘシ

第十六條　上告者ハ其上告狀ニ添ヘテ金十圓ヲ大審院ニ預クヘシ若シ其金高ヲ預ケサルトキハ上告ヲ爲スコトヲ得ス

第一　若シ上告ヲ取上ケサルトキハ其預リ金ヲ沒入ス

第二　若シ上告ヲ取上ケ原裁判ヲ破毀シタルトキハ預リ金ヲ還付ス

第三　若シ上告ヲ取上ケ被告人ト對審シタルノ後之ヲ斥ケテ原裁判ヲ破毀セサルトキハ預リ金ヲ沒入シ又訴訟入費規則ニ照シテ被告人ノ費用ヲ償ハシム（被告人トハ上告者ノ相手方ヲ云）

第十七條　上告ヲ爲ス者ハ先ツ原裁判所ニ屆出ツヘシ原裁判所ニ於テハ書類ヲ三日內ニ大審院ニ遞送スヘシ

第十八條　上告ニ付テハ裁判ノ執行ヲ停メス大審院已ニ原裁判ヲ破毀スルニ至レハ卽日原裁判所ニ通報ノ（大審院ヨリ郵便ヲ發ス）執行ヲ停メ更ニ審判落着ノ日ニ至テ前ノ執行ヲ取消ノ後ノ裁判ヲ執行セシムヘシ

但內國人ニテ裁判外ノ人民ニ對シ又ハ裁判外ノ人民ヨリ內國人ニ對スル上告ハ原裁判ノ執行ヲ停ムヘシ

第十九條　上告狀ハ原告人自ラ之ヲ捧クルモ又ハ代言人ヲシテ之ヲ捧クシムルモ本人ノ意ニ任ス

第二十條　大審院ニ於テ判事審聽シ不當ナル上告ナリト決スルトキハ何々ノ理由ヲ以テ上告ヲ受理セサルノ旨ヲ言渡スヘシ

第二十一條　判事審聽シテ當然ノ上告ナリトシ之ヲ判決スヘキ旨ヲ言渡シタルトキハ其後二日內ニ被告人呼出狀ヲ仕出スヘシ此呼出狀ニハ上告狀ノ副本ヲ添フヘシ

第二十二條　被告人ハ呼出狀ヲ受取リタルヨリ三十日內ニ答辨書ヲ作リ自身又ハ代言人ヨリ之ヲ大審院ニ捧クヘシ但被告人ノ住所ヨリ大審院ニ至ルノ距離八里ヨリ遠キトキハ八里毎ニ一日ヲ增スヘシ

第二十三條　大審院ニ於テ被告人ノ答辨書ヲ受取リシトキハ院長ヨリ判事ノ中ニ於テ一人ノ主任ヲ命シ一件書類ヲ取纏メ遲緩ナク一件始末書ヲ作ラシメ然ル後ニ原被對審ノ日ヲ豫定シ三日以前ニハ原被對審ノ呼出狀ヲ原被雙方ニ送達スヘシ

第二十四條　原被對審ノ節ハ判事席ニ臨ミ最初ニ主任判事一件始末ヲ宣讀シ次ニ原告ノ陳述次ニ被告ノ陳述次ニ原被交互ノ論辯ヲ審聽シ而シテ後ニ原告人上告理アリト決スルトキハ何々ノ理由ヲ以テ原裁判所ノ裁判ヲ破毀スルニ付更ニ某裁判所ニ於テ裁判ヲ受クヘキ旨又ハ大審院ニ於テ裁判スヘキ旨ヲ言渡スヘシ

第二十五條　若シ原告人ノ上告理ナシト決スルトキハ何々ノ理由ヲ以テ上告ヲ斥クル旨ヲ言渡スヘシ

第四章　本章治罪法制定ニ依リ廢止

〔テ(一八)朝鮮人ニ係ル控訴手續(明治十五年八月廿二日丁第四十三號達)〕

御國人民ヨリ朝鮮國人ニ對スル控訴ノ儀ニ付大坂控訴裁判所ヨリ甲號ノ通伺出テ乙號ノ通及指令候條爲心得此旨相達候事

(甲)我國ヨリ在朝鮮國人ニ係ル控訴被告人召喚ノ儀ニ付伺

大坂府下秋宗淸兵衛ヨリ仝府寄留朝鮮國人扑孫淙ヘ係リ大坂始審裁判所ヘ出訴ノ末別紙控訴狀(略之)ニ揭載ノ如ク裁判ヲ受ケ之ニ服セス及控訴候然ルニ被告人ハ右裁判後皈國致シ現今ハ釜山浦辨察衙門中ニ罷在候趣ニ付召喚ノ手續ハ當廳ヨリ直ニ彼港在留我國領事ヘ照會シ領事ヨリ後ノ官衙ヘ移シ候順序ニテ可然哉別紙照會案(略之)相添併セテ伺候間至急御指令ヲ乞ヒ候也

明治十五年七月二十二日

(乙)伺ノ趣必スシモ被告人ノ出廷ヲ要セサル儀ニ付訴狀ヲ添ヘ領事廳ヘ移之シテ被告人ノ答辨書ヲ差出サシムル樣可取計事

明治十五年八月廿一日

〔ア〕(一九)預リ金訴訟(明治七年三月四日第廿七號布告)

預金穀ハ其証書中ニ封印ノ儘預リ置候歟或ハ預リ中融通使用ヲ爲サル丶明文ナキ分ハ出訴候トモ本年五月一日以後ハ貸金同樣ニ裁判可致候條此旨布告候事

○明治十年一月二十九日第十號布告

預金穀ノ訴訟ハ其証書中ニ封印ノ儘預リ置候歟或ハ預リ中融通使用ヲ爲サヽル明文アルモノハ年數ニ不拘受理スヘキ成規ニ候處自今二十年以前ニ係ルモノハ一切裁判不及候條此旨布告候事

〔サ〕(二〇)裁判所取締規則(明治七年五月二十日司法省甲第九號達)

第一條　訟廷ハ訴訟口詰必出席シ詞訟人ヲ順次ニ呼込ミ裁判官ノ命ニ從ヒ失敬又ハ紛鬧ノ丶アラサル樣其取締ヲ爲スヘキ事

第二條　原被告人等渾テ訟廷ニ出ル者ハ呼込ノ次第ニ從ヒ沈默整列シ裁判官出席スレハ各起テ禮ヲ爲スヘシ

第三條　原被告共其事情ヲ餘蘊ナク幾回モ詳細ニ陳述スヘシト雖モ互ニ先ツ發言スル者ノ終言リタル後ニアラサレハ更ニ其言ヲ發スヘカラス

第四條　凡ソ進退動作ハ輕躁ニ渉ラス言語ハ憤怒高激ニ渉ラス諄々トシテ其事情ヲ陳述シ且裁判官ニ對シテ尊敬ヲ致スニ注意スヘシ

第五條　前條ニ記載シタル丶ヲ守ラス裁判官ニ對シ尊敬ヲ欠ク者アルトキハ裁判官直チニ譴責ヲ加フヘシ

第六條　譴責ヲ加フヘキモノアルトキハ其裁判ヲ中止シ犯則ニ關係ナキ者ハ一旦扣所ニ退カメ然ル後犯則ノ者ヲ譴責スヘシ

第七條　裁判官ヲ罵ルモノアルトキハ前條ノ如ク其裁判ヲ中止シ之ヲ斷獄課ニ付シ本律ヲ科スヘキ事

第八條　裁判ノトキ公聽ヲ許サレタルモノハ人々皆沈默敬聽スヘシ但裁判官審問ノ際公聽ノ者若シ紛鬧ニシテ審問ノ妨礙アリト思量スルトキハ便宜ヲ以テ訴訟口詰ニ命シ公聽ノ者ヲ退カシムヘシ

(二一)裁判所權限(明治十四年十二月廿日第七十三號布告)

治安裁判所及始審裁判所ノ權限左ノ通制定ス

第一條　治安裁判所ハ訴訟事件ヲ勸解ス但諸官廳ニ對スル事件及ヒ商事ニ係リ急速ヲ要スル事件ハ勸解スルノ限ニアラス

第二條　治安裁判所ハ請求ノ金額及ヒ價額百圓未滿ノ訴訟ニ付始審ノ裁判ヲ爲ス

第三條　治安裁判所ハ人事其他金額ニ見積ル可カラサルモノヲ裁判スルヲ得ス

第四條　始審裁判所ハ請求ノ金額及ヒ價額百圓以上並ニ第三條ニ掲ケタル治安裁判所權外ノ訴訟ニ付始審ノ裁判ヲ爲ス

第五條　始審裁判所ハ其管轄地內ノ治安裁判所ノ始審裁判ニ對スル控訴ニ付終審ノ裁判ヲ爲ス

但控訴ノ手續ハ明治十年第十九號布告控訴手續ニ照準スヘシ

(二二)裁判所ヨリ呼出ヲ受ケ遲不參處分(明治十年一月十七日第五號布告)

凡裁判所ノ呼出ヲ受ケタルモノ疾病等ノ事故アリテ遲參又ハ不參スルトキハ其事故ヲ詳記シ呼出刻限マテニ其裁判所ニ屆出ヘシ若シ右刻限ヲ過キテ屆出ルカ又ハ無屆ニテ遲參不參スルトキハ裁判官ニ於テ直ニ五錢以上十圓以下ノ罰金ヲ科スヘシ

(二三)裁判管轄

○明治十四年十月七日第五十六號布告

小笠原島裁判事務當分東京出張所ニテ治安裁判所(即違警罪裁判所)始審裁判所(即輕罪裁判所)ノ權限ヲ以テ裁判セシメ民刑事控訴及重罪裁判ハ東京控訴裁判所ノ管轄ト相定メ明治十五年一月一日ヨリ施行候條此旨布告候事

但該島ニ於テ治罪ノ手續ハ適宜取扱フヘシ

○明治十四年十月七日第五十七號布告

伊豆七島裁判事務當分該島吏ヘ民事ハ百圓以下及勸解幷刑事ハ違警罪裁判ヲ委任シ民事百圓以上刑事輕罪以上ハ東京始審裁判所ノ管轄ト相定メ明治十五年一月一日ヨリ施行候條此旨布告候事　但該嶋ニ於テ裁判治罪ノ手續ハ適宜取扱フヘシ

○明治十六年一月十日第二號布告

明治十四年十月第五十三號同十五年六月第二十八號布告各裁判所ノ位置及管轄區別表ノ通改定シ始審裁判所支廳ハ本廳同一ノ權限ヲ以テ裁判セシム但明治十六年二月一日ヨリ施行ス

○明治十六年一月三十一日司法省甲第二號達

本年第二號布告ヲ以テ始審裁判所管內ニ支廳ヲ被置候ニ付テハ民事訴訟ハ支廳ヘ出訴スヘキモノト雖トモ被告人ノ承諾ヲ得タル上ハ其承諾書ヲ添ヘ始審裁判所ヘ出訴スルヿヲ得

但支廳管內ニアル治安裁判所ノ裁判ニ對スル控訴ニ於ケルモ本文ト同シ

控訴	始審 本廳	始審 支廳	治安府縣國名	區郡名
大京	東京		東京府	日本橋區 京橋區
				芝區 麻布區 赤阪區 荏原 東多摩
				麹町區 四谷區 牛込區 小石川區
				本郷區 南豐島
				神田區 下谷區 淺草區 南足立 北豐島
				本所區 深川區 南葛飾
	横濱		武藏	横濱區 久良岐 橘樹 都筑
			相模	三浦 鎌倉 高坐
				足柄上 足柄下 大住 陶綾 愛甲
			武藏	(南北西) 多摩
			相模	津久井
	千葉		下總	下埴生 千葉 印幡 南相馬 東葛飾
			上總	上埴生 夷隅 長柄 市原
			上總	天羽 周淮 望陀
			安房	全國 四郡
			下總	海上 香取 匝瑳
			上總	山邊 武射
	木更津		千葉	千葉縣
	八日市場		八王子	
			千葉	
	木更津		千葉	
	北條		八王子	
	八日市場		横濱	
			小田原	神奈川縣
			武藏	東京府
			相模	横濱區 久良岐 橘樹 都筑
				三浦 鎌倉 高坐
				足柄上 足柄下 大住 陶綾 愛甲
			武藏	(南北西) 多摩
			相模	津久井

控訴				
水戸				
土浦				
下妻				
水戸				
土浦				
下妻				
茨城縣				
常陸	東西	茨城	那珂	久慈 多賀 鹿島ノ内
下總	新治	筑波	河内	信太 行方 鹿島ノ内
	北相馬			
常陸	眞壁			
下總	猿島	結城	岡田	豐田 西葛飾
宇都宮				
栃木				
宇都宮				
栃木				
栃木縣				
下野	上都賀ノ内	下都賀	寒川	安蘇 梁田 足利
	上都賀ノ内	河内	芳賀	鹽谷 那須
浦和				
熊谷				
浦和				
川越				
熊谷				
大宮				
埼玉縣				
下總	中葛飾			
武藏	北足立	新庄	入間	高麗 南埼玉 北葛飾
	北埼玉	比企	男衾	横見 大里 榛澤 旛羅
	兒玉	賀美	那賀	
武藏	秩父			
前橋				
群馬縣				
上野	東群馬(南北)	勢多	佐位	那波 利根 吾妻
	西群馬ノ内猪野川以東			
	碓氷(南北)	甘樂	片岡	緑野 多胡
	西群馬ノ内猪野川以西			
	新田	山田	邑樂	
前橋				
高崎				
太田				
静岡				
駿河	庵原	有渡	安部	志田 益津
下田				
伊豆	那加	加茂ノ内		

裁判所

静岡		沼津	静岡縣	駿河 伊豆	駿東 富士 君澤 田方 加茂ノ内
	濱松	濱松		遠江	豊田 磐田 長上 敷知 引佐 麁玉 濱名
		掛川			山名 周智 城東 佐野 榛原
甲府		甲府	山梨縣	甲斐	東山梨 西山梨 東八代 西八代 南巨摩 中巨摩 北巨摩
		谷村			南都留 北都留
長野		長野	長野縣	信濃	上水内ノ内 上高井 更級ノ内 埴科ノ内
		飯山			下高井 上水内ノ内 下水内
	松本	松本			東西筑摩ノ内 南北安曇ノ内 上伊奈ノ内
		飯田			上伊奈ノ内 下伊奈
		上諏訪			上伊奈ノ内 諏訪
		大町			東筑摩ノ内・南北安曇ノ内
		福島			西筑摩ノ内
	上田	上田			小縣 埴科ノ内 更級ノ内
		岩村田			南佐久 北佐久
新潟		新潟	新潟縣	越後	新潟區 西中蒲原 南蒲原ノ内
	新發田	新發田			北蒲原
		村上			岩船
	長岡	長岡			古志 北魚沼 三島 刈羽ノ内 南蒲原ノ内
		柏崎			刈羽ノ内
		六日町			南魚沼 中魚沼
	高田	高田			東頸城 中頸城
		糸魚川			西頸城
	相川	相川		佐渡	全國三郡
京都		京都	京都府	山城	上下京區 愛宕 葛野 宇治ノ内
		伏見			乙訓 紀伊 久世 相樂 綴喜 宇治ノ内
		園部		丹波	船井 南桑田 北桑田

大阪控訴

大阪	大阪府	摂津	西區 北區 西成ノ内 木津川以西 島上 島下
		河内	豐島 能勢 讃良 交野 茨田 東區
		摂津	南區 東成 住吉 西成ノ内 木津川以東
		河内	大縣 河内 若江 澁川 高安 志紀ノ内
		河内	丹北ノ内 大和川以北
		和泉	堺區 全國四郡
		河内	安宿 丹南 八上 古市 石川 錦部 志紀ノ内
			丹北ノ内 大和川以南
		大和	添上 添下 山邊 平群 式上 式下 十市
			廣瀬 宇陀 高市ノ内 葛下ノ内
			宇智 吉野 葛上 忍海 高市ノ内
			葛下ノ内
宮津	宮津	丹後	熊野 竹野 中 與謝 加佐ノ内
		丹後	天田 何鹿
			加佐ノ内
福知山	中ノ島	摂津	神戸區 八部 菟原 武庫 川邊 有馬
	天王寺	播磨	明石 美囊
	堺	丹波	多紀 氷上
	奈良	淡路	全國二郡
	五條	播磨	多可 加西 印南 神東 神西 飾東 飾西
神戸	神戸	但馬	全國八郡
明石	明石		
篠山	篠山		
洲本	洲本		
姫路	姫路		
豐岡	豐岡		
兵庫縣	兵庫縣	摂津	神戸區 八部 菟原 武庫 川邊 有馬
		播磨	明石 美囊
		丹波	多紀 氷上
		淡路	全國二郡
		播磨	多可 加西 印南 神東 神西 飾東 飾西
			佐用 宍粟 揖東 揖南 赤穗 加東 加古
		但馬	全國八郡

裁訴

岡山	岡山縣	備前	岡山區 全國八郡
		備中	宇都 加陽ノ内
津山	津山		小田 後月 下道 窪屋 淺口
			上房 阿賀 哲多 川上 加陽ノ内
玉島	玉島	美作	全國十二郡
高梁	高梁		
大津	大津縣	近江	滋賀 野洲 甲賀 粟太 蒲生 高島
彦根	彦根		神崎 愛智 犬上 坂田 伊香 東淺井西淺井
福井	福井縣	越前	南條 今立 丹生 吉田 坂井 足羽
			大野
大野	大野	若狹	遠敷 大飯
小濱	小濱	越前	敦賀
敦賀	敦賀	若狹	三方
福井	福井縣	加賀	金澤區 河北 石川
金澤	金澤	加賀	能美 江沼
小松	小松		鹿島 羽咋
七尾	七尾		
七尾	七尾		
金澤	金澤		
石川縣	石川縣		

番	所	判
	松山	高知
		中村
大洲	西條	松山
愛媛縣		高知縣
伊豫		土佐
喜多	宇摩	野間 桑 風早 上下浮穴 和氣 伊豫 温泉
西宇和	新居	周布 桑村 越智
幡多		安藝 香美 長岡 土佐 吾川 高岡
美烏	三好	麻植 河波
名東	名西	勝浦 那賀 海部 板野
日高 東西牟婁	和歌山區	伊都 那賀 名草 海部 有田
田邊		
和歌山		
脇町		
脇町	德島	
德島縣		
阿波		
美馬	名東	名西 勝浦 那賀 海部 板野
安藝	香美	長岡 土佐 吾川 高岡
幡多		
土佐		
中村		
高知縣		
越中		
礪波		
下新川		
上新川	婦負	
球洲	鳳至	
富山		
富山	魚津	高岡
富山縣		
和歌山縣		
紀伊		
和歌山區	伊都 那賀 名草 海部 有田	
日高 東西牟婁		
田邊		
和歌山		
脇町		
脇町	德島	
德島縣		
阿波		
名東	名西 勝浦 那賀 海部 板野	
美烏	三好 麻植 河波	
安藝	香美 長岡 土佐 吾川 高岡	
幡多		
土佐		
中村		
高知縣		
松山		

	安濃津	名古屋
	山田	岡崎
岐阜	山田	安濃津
	上野	四日市
	三重縣	愛知縣
	伊勢 志摩 紀伊	伊賀
	伊勢	三河
武儀	厚見 羽栗 郡上	各務 中島 方縣 山縣
	多氣 度會 全國 二郡 (南北)牟婁	全國 四郡
	桑名 員部 朝明 三重	飯野
	河曲 鈴鹿 奄藝 安濃 飯高 一志	
	八名 南北設樂 寶飯 渥美	
	額田 碧海 幡豆 東西加茂	
	丹羽 葉栗 中島	
	知多 愛知ノ內	
	名古屋區 東西春日井 海東 海西 愛知ノ內	
	那珂 多度 三野 豊田 鵜足 阿野ノ內	
	大內 阿野ノ內 寒川 三木 山田 香川 小豆	
	那珂 多度 三野 豊田 鵜足 阿野ノ內	
	名古屋區 東西春日井 海東 海西 愛知ノ內	
	知多 愛知ノ內	
	丹羽 葉栗 中島	
	額田 碧海 幡豆 東西加茂	
	八名 南北設樂 寶飯 渥美	
	河曲 鈴鹿 奄藝 安濃 飯高 一志	
	桑名 員部 朝明 三重	
	全國 四郡	
	多氣 度會 全國 二郡 (南北)牟婁	
	厚見 羽栗 郡上	各務 中島 方縣 山縣
岐阜	山田	安濃津
	山田	岡崎
	安濃津	名古屋

判所	岐阜		大垣	岐阜縣	美濃	海西 (上下)石津 多藝 不破 本巢 席田 安八 池田 大野
			御嵩			賀茂 可兒 土岐 惠那
		高山	高山		飛彈	全國三郡
廣島控訴裁判	廣島		廣島	廣島縣	安藝	廣島區 沼田 安藝 佐伯 山縣 高宮 加茂 豐田
			三次		安藝 備後	高田 三谿 奴可 三上 三次 惠蘇
		尾道	尾道		備後	御調 甲奴 世羅 深津 品治 沼隈 蘆田 安那 神石
	山口		山口	山口縣	長門 周防	都濃 佐波 吉敷 美禰
			岩國		周防	能毛 大島 玖珂
		赤間關	赤間關		長門	赤間關區 厚狹 豐浦
			萩			大津 河武 見島
	松江		松江	島根縣	出雲	大原 意宇 能義 秋鹿 島根 仁多
			今市		出雲 石見	神門 出雲 楯縫 飯石 安濃
		濱田	濱田		石見	那賀 邑智 邇摩 美濃 鹿足

所		西鄉	西鄉		隱岐	全國四郡
	鳥取		鳥取	鳥取縣	因幡	全國八郡
			倉吉		伯耆	河村 久米
		米子	米子		伯耆	汗入 會見 八橋 日野
長崎控	長崎		長崎	長崎縣	肥前	長崎區 北高來 東彼杵 西彼杵ノ內
			大村			
			島原			南高來
		平戶	平戶		肥前	北松浦
			武生水		壹岐	全國二郡
		福江	福江		肥前	南松浦 西彼杵ノ內
		嚴原	嚴原		對島	全國二郡
	佐賀		佐賀	佐賀縣	肥前	基肆 養父 三根 神崎 佐賀 小城 杵島 藤津
			唐津		肥前	東松浦 西松浦
	福岡		福岡	福岡縣	筑前	福岡區 席田 粕屋 宗像 穗波 早良 嘉麻 上座 下座 夜須 御笠 志摩 怡土 那珂
		久留米	米留米		筑後	全國十郡
			柳川			
		小倉	小倉		豐前 筑前	企救 田川 京都 中津 築城 上毛 遠賀 鞍手

訴	裁	判
大分	熊本	鹿兒島
中津	天草	
大分 佐伯 竹田 杵築 中津 豆田	熊本 宮地 山鹿 八代 人吉 天草	鹿兒島 水引
大分縣	熊本縣	鹿兒島縣
豐後	肥後	薩摩 大隅
大分 北海部ノ內 速見ノ內 南海部 北海部ノ內 大野ノ內 直入 大野ノ內 東國東 速見ノ內 西	熊本區 飽田 託摩 宇土合志 上下益城 阿蘇 山鹿 山本 菊地 玉名 八代 蘆北 求麻 天草	薩摩 鹿兒島 頴娃 揖宿 川邊 谷山 阿多 給梨 日置ノ內 大隅 始羅 囎唹 肝屬 熊毛 大隅 桑原 馭謨 薩摩 高城 伊佐 甑島 出水 日置ノ內 大隅 菱刈
豐前		
下毛 宇佐		
豐後		
玖珠 日田		

所	宮城	控
宮崎	仙臺	福島
大島	石卷	白河 平 若松
大島 宮崎 都城 延岡	仙臺 古川 石卷 大河原	福島 中村 白河 平 若松
宮崎縣	宮城縣	福島縣
日向	陸前	岩代 磐城 磐城 岩代 越後
大隅 大島 宮崎 兒湯 諸縣ノ內 那珂ノ內 諸縣ノ內 那珂ノ內 臼杵	仙臺區 宮城 名取 黑川 志田 加美 玉造 栗原 遠田 桃生 牡鹿 登米 本吉 陸前 柴田 刈田 伊具 亘理	岩代 信夫 安達 伊達 磐城 田村ノ內 磐城 守多 行方 磐城 (東西)白河 石川 岩代 岩瀨 安積ノ內 磐城 磐前 磐城 楢葉 菊田 標葉 田村ノ內 岩代 (南北)會津 越後 那麻 河沼 大沼 安積ノ內 東蒲原

院

訴裁判所函館控訴裁判所

地方裁判所	支部	區裁判所	縣	國	郡
山形		山形	山形縣	羽前	東西南北村山
		新庄			最上
	米澤	米澤			(東西南)置賜
	酒田	酒田		羽前	(東西)田川
		鶴岡		羽後	飽海
盛岡		盛岡	岩手縣	陸中	(南北)九戸　西閉伊　(南北)岩手　紫波
					稗貫　(東西)和賀
		福岡		陸奥	二戸
		宮古		陸中	東南閉伊　北中閉伊
	磐井	磐井		陸中	(東西)磐井　膽澤　江刺
				陸前	氣仙
秋田		秋田	秋田縣	羽後	川邊　南秋田
		本庄			由利
	大曲	大曲			仙北　平鹿　雄勝
		横手			
		能代		羽後	山本　北秋田
		大館		陸中	鹿角
弘前		弘前	青森縣	陸奥	(西中南)津輕
		鰺ヶ澤			
		青森			東津輕　下北　上北ノ内
	八戸	八戸			三戸　上北ノ内
		五所河原			北津輕
函館		函館	函館縣	渡島	函館區　龜田　上磯　茅部
				膽振	山越
		江刺		渡島	檜山　爾志
				後志	久遠　太櫓　瀬棚　奧尻
		福山		渡島	松前
		壽都		後志	島牧　壽都　歌棄　磯谷
札幌		札幌	札幌縣	石狩	札幌區　全區九郡
				膽振	虻田　有珠　室蘭　幌別　勇拂　白老　千歳
		幌泉		十勝	全國七郡
				日高	全國七郡
		增毛		天塩	全國六郡
				北見	宗谷　枝幸　利尻　禮文
		小樽		後志	小樽　余市　美國　積丹　高島　忍路
					古平
		岩內			古宇　岩內
根室		根室	根室縣	根室	全國五郡
				千島	全國八郡
				北見	斜里　網走　宮呂　紋別
		厚岸		釧路	全國七郡

〔キ〕(二四)義務証書ニ代人結約シタル者出訴裁判手續(明治十六年六月廿四日司法省丁第十八號達)

義務ノ証書ノ某代理某ト代人ノ名ヲ以テ捺印結約シタル者ハ權利者ニ於テ此証書ヲ提供シ出訴スルニハ其本人ヲ相手取ル固ヨリ當然ナリト雖トモ便宜ニ隨ヒ記名捺印シタル代人ヲ相手取ルヿアルモ必要却スルヲ要セス他ノ本人又ハ代人ヲ引合人トシテ召喚シ俱ニ之カ答辯ヲ爲サシメ被告者ノ義務ニ服スル者ハ被告ヲシテ負擔セシメ引合人ノ義務ニ服スルニ於テハ引合人ヲシテ負擔セシムル樣相當ノ裁判ヲ爲シ與フヘキ筋ニ有之候條豫テ心得モ可有之候得共爲念此旨相達候事

〔ミ〕(二五)民事訴訟ニ勸解ヲ請フノ諭達(明治九年十一月廿七日司法省甲第十七號諭達)

民事ノ訴訟ハ可成丈一應區裁判所ノ勸解ヲ乞フ可シ此旨諭達候事

(二六)民事審理中刑事ノ告訴アル場合(明治十一年十月八日司法省丙第九號達)

民事審理及裁判宣告後該事件ニ付刑事ノ告訴ヲ爲シタル場合民事ノ審理ヲ中止シ又ハ罪証明白ナル者ハ裁判執行ヲ停止スヘキノ求ヲ爲スヘシ但本文ニ抵觸スル從前ノ指令等ハ一切取消候儀ト心得ヘシ

(二七)民事裁判上官吏呼出着席手續(明治十六年二月三日司法省丁第六號達)

民事裁判上引合人トシテ出廷セシメタル官吏着席ノ儀明治十五年丙第三十二號達ニ準スヘシ

〔シ〕(二八)身代限處分法(明治五年六月廿三日第百八十七號布告)

今般華士族平民共身代限規則被相定候條左之通相達候事

但當壬申八月朔日ヨリ施行可致事

華士族平民身代限規則

平民身代限抵償トシテ差押フ可カラサル品類

一時服着替共 男女共各 二通宛

一夜具 男女共各 一通宛

一本人ノ職業ヲ爲スニ必要ナル諸物品但學藝ヲ人ニ教ヘ又ハ農工商等職業ニ必要ナル書類器械品物等其金額五十兩ニ至ル迄最モ本人ノ擇ム所ニ任ス可シ其直段ハ貸主借主ヨリ監定ノ者道具屋ノ類一人宛差出シ外入札人ト共ニ入札致サセ町村役人ニ於テ總入札ヲ比較

シ高札ヲ以テ其價ヲ定ムヘキ事

一食料

家族ノ人口ヲ量リ一ケ月間用サル飯米ヲ殘シ置クヘキ事

但男子ハ一日ニ付五合麥ハ一舛雜穀ハ一舛五合婦女幼少ハ四合麥ハ八合雜穀ハ一舛二合宛ノ事

一鍋釜及炊具各　一通

華士族身代限抵當トシテ差押フヘカラサル品類

一家祿（此項ハ五年第三百二十七號布告ヲ以テ取消ス）

但人口ヲ量リ年々飯米ヲ引殘シ其餘分無キ歟或ハ不足ノ者ハ其半高ヲ返金濟迄金主ヘ渡サセ候事

一大小類　男子一人ニ付各一腰宛

一冠服　男子一人ニ付各一通宛

一時服着替共　男女共　各二通宛

一夜具　男女共　各一通宛

一本人職業ヲ爲スニ必要ナル諸物品

但學藝ヲ人ニ敎ヘ又ハ農工商等ノ職業ニ必要ナル書類及諸器械品物等其金額五十兩ニ

至ル迄最モ本人ノ擇ム所ニ任スヘシ其直段ハ貸主借主ヨリ監定ノ者（道具屋ノ類）一人宛差出シ外入札人ト共ニ入札致サセ村町役人ニ於テ總入札ヲ比較シ高札ヲ以テ其價ヲ定ムヘキ事

一鍋釜及炊具類　各一通

右身代限ノ節ハ三十日間裁判所門前高札場並ニ本人家宅ヘ掲示ヲ出シ其次第傳承日限中追願ノ者ハ取糺ノ上可處置事

但新聞紙ヲ刊行スル地ニ於テハ亦之ニ記載セシムヘシ

一前條ニ記スル所ノ引殘スヘキ必要物件ノ內未タ代價ヲ拂ハサル分ハ賣主ヨリ日限內訴出レハ現品ヲ取戻スヿヲ得ヘシ

但現在着用ノ衣類夜具ハ此限ニアラス

一身代限ノ物件ハ入札拂ニ出ス可シ尤モ金銀器等ノ定價判然タル物品ハ眞價ヨリ低ク賣拂フヘカラス且ツ賣拂金ノ總類ハ其者ノ負償及ヒ右一件諸費用ヲ償フニ過クヘカラス

但入札拂ノ日ヨリ三日前ニ其品物及ヒ場所時刻ヲ裁判所門前並ニ其者ノ居宅及ヒ各地士民群集ノ所ヘ掲示シ及ヒ新聞紙ヲ刊行スル地ニ於テ亦之ニ記載セシムヘシ且ツ貸主借主ヨリ差出セシ監定ノ者モ他人ト共ニ入札致サセ村町役人ニ於テ總入札ヲ比較シ高札ヲ以テ其價ヲ定メ之ヲ現金ニテ取立裁判所ヘ差出ス可シ

○明治七年七月三日第七十一號布告

明治六年(五月)第百八十一號布告身代限揭示案左之通改正候條此旨布告候事

右之者儀何町村何ノ誰ヨリ何々(其事目ヲ掲ク)出訴ニ及ヒ吟味ノ上身代限申付ルニ付若シ何ノ誰(何町村何之)ヘ係リ金穀其ノ他諸取引ノ訴有之者ハ當何日ヨリ來ル何月何日迄日數六十日以内ニ當裁判所ヘ訴出ツヘシ右日限過去訴出ルニ於テハ此度身代限分散金ノ分配ニハ不差加者也

○明治五年九月十八日第二百七十五號達

父兄ト同居ノ子弟或ハ別居シテ財産ヲ異ニスルモノ又ハ父既ニ家督ヲ其子ニ讓リ隱居別宅シテ財産ヲ異ニスル者自今一己ニ金銀借受候分其証券中本家ノ戸主保証ノ調印無之上ハ貸主ニ於テ本家ノ財産ヲ目的トシ貸シ與フ筋無之候ニ付若シ右等ノ者共返金相濟訴訟ニ及ヒ候節同居ノ者ハ其身所持ノ品物ノミ分産異居ノ者ハ其財産ノミヲ以テ之ニ當テ身代限リニ裁判申渡候條條爲心得此段相達候事

○明治六年三月五日第八十八號達

僧侶借財滯出入ニ付身代限規則左之通被相定候條此段相達候事

僧侶身代限規則

抵償トシテ差押フ可カラサル品類

一食料

寺内ノ人口ヲ量リ僧侶ハ一日ニ五合麥ハ一舛雜穀ハ一舛五合尼及婦女幼少ハ四合麥ハ八合雜穀ハ一升二合宛一ケ月間用フル飯米ヲ殘シ置クヘキ事

一建物

法用ニ必要ナル箇處

但本堂等ヘ添建候トモ榮耀ニ屬スル箇所ハ此限ニアラス

一寄附帳ニ記載スル部分

一什物帳ニ區別シテ記載スル古來傳承ノ寶物並法用ニ必要ナル部分

一法衣 寺主并所化及尼共各一通宛

一時服着替共 寺主并所化及婦女共各二通宛

一夜具 寺主並所化及婦女共各一通宛

一鍋釜及炊具類各一通

一本人職業ヲ爲スニ必要ナル金額五十兩ニ至ル迄ノ物品ヲ差除ク等其他ノ方法ハ華士族平民身代限ニ同シ

○明治六年三月五日第八十九號達

今般僧侶身代限規則被相定候ニ付テハ寺院所有ノ田園建造物諸器什檀家ヨリ寄附ノ分又ハ

法用ニ必要ナル分並ニ古來傳承ノ寺寶等ノ部分判然相立不申候テハ差支候條左ノ規則ニ從ヒ寄附帳什物帳相綴リ置キ可申候

一寄附帳ニハ何年何月何誰寄附ノ田園及別建造物坪數諸器物ノ質分ニ至ルマテ詳細ニ記載スヘシ

一什物帳ニハ法用ニ必要ノ分幷ニ寺寶ヲ區別シ記載スヘシ

一右二帳二部ツヽ相綴リ檀家法類共兩人以上並ニ其地ノ戸長檢査ノ上各姓名ヲ署シ之レニ調印シ一部ハ戸長役所ニ藏シ一部ハ其寺院ニ藏シ置ク可シ

右之通相達候事

○明治六年七月十七日第二百五十二號達

負債者身代限ニ遇フ節其者ヘ對シ貸金穀其他義務ヲ得ヘキ者定約期限未滿内ノ分處置振左之通被定候條此旨相達候事

第一條　貸金穀又ハ義務ヲ得ヘキ者定約期限未滿内ニハ訴出スルヿヲ許サヽル規則ナレトモ其負債者又ハ義務ヲ行フヘキ者右期限未滿ニ身代限ニ遇フ時ハ訴出ルヿヲ得ヘシ

第二條　定約期限未滿内ニ訴出ル者ハ滿期後訴出ル者ト同一ノ權利ヲ有シ身代限財産糶賣金ノ分配ヲ受クルヿヲ得ヘシ

第三條　請人証人等連印ニテ本人返濟相滯ルニ於テハ引受返濟可致ノ明文之レアル証書ヲ取置タル者ハ本人身代限財産糶賣金ノ分配ヲ受ケ尚ホ不足アラハ滿期ノ時ニ至リ請人証人ニ掛リ之ヲ訴ルヿヲ得ヘシ（八年百二號布告ヲ見合スヘシ）

第四條　身代限ニ遇フ者期限未滿内ノ者ニハ滿期ノ時ニ至リ返濟セント欲スルトキハ別段請人ヲ立請人ヨリ動不動産ヲ引當又ハ質物ト爲シ違變ナキヿヲ証明シテ原告人ノ承諾ヲ求ムルヲ必要トス

第五條　負債者滿期ヲ保スル爲メ改メテ請人ヲ立請人ヨリ動不動産ヲ引當又ハ質物ト爲シ違變ナキヿヲ証明シ原告人之ヲ承諾スル時ハ其原告人ハ此回ノ身代限財産糶賣金ノ分配ヲ求ムルコトヲ得ヘカラス

第六條　定約期限未滿内ノ債主ハ身代限ニ遇フ負債主ニ對シ期限未滿内ニ訴ルモ滿期後ニ至リ訴フルモ其者ノ情願ニ任スト雖モ身代限ニ遇フ者ノ動不動産ヲ引當又ハ質物ニ取置キタル債主ハ右動不動産ヲ身代限ノ糶賣ヲ爲スニ付已レノ受取ルヘキ金高ヲ求ムルヿヲ得ヘキ而已ニテ糶賣ヲ爲スヿヲ拒ムヲ得ヘカラス

第七條　動不動産ヲ引當又ハ質物ニ取置タル者ハ其財産糶賣金ノ内ニテ元金高又ハ利息アレハ利息ト共ニ其定約ノ証書ニ據リ處分ノ時迄ノ金高ヲ筭計シ受取ル可キノ求ヲ爲シ裁判所ニ於テハ糶賣金分配ノ規則ニ從ヒ引當又ハ質物ヲ取置タル者ニ分配スヘキ金高ヲ引渡ス可シ

第八條　引當又ハ質物ヲ取置カサル金穀ノ債主定約期限未滿内ニ訴出ル時ハ元金高又ハ利息アレハ利息ト共ニ定約ノ証書ニ據リ處分ノ時迄ノ金高ヲ算計シ受取ルヘキノ求ヲ爲シ裁判所ニ於テハ糶賣金分配ノ規則ニ從ヒ處分ヲ爲スヘシ

○明治八年四月十日第五十號布告

地所ノ質入書入ハ尋常ノ私約ト違ヒ戸長役場ノ帳簿ニ記載シテ奥書割印モ之レアル公正ノ証書ニ付若シ身代限リ財産中質入又ハ書入ノ地所アリテ其債主掲示中ニ訴出サル節ハ其地所糶賣代價ノ中ニテ債主受取ルヘキ元金高ニ糶賣金配當ノ日マテノ利息ヲ加ヘ第一番ニ引キ去リ裁判所ニ於テ之ヲ糊封シ掛リ官員兩名調印ノ上戸長役場ニ預ケ置キ後日債主願出次第相渡スヘク候條此旨布告候事

但質入書入ノ金高及ヒ利息等不分明ノ節ハ本人呼出シ取調可申事

○明治五年九月十三日第九號司法省達

凡ソ動産不動産取引ノ詞訟ヲ審判スルニ原告被告双方ノ内一方ノ者負公事ニ決スル時ハ日切濟方申付候上仍ホ不相濟ニ於テハ身代限申付候方法ニ有之候處自今日切濟方ノ舊法ヲ廢シ一方ノ者負公事ニ相決シ直ニ濟方不相成候時ハ身代限ノ方法ヲ執行可致候事

○明治十五年二月四日第十二號達

貸下金其他諸上納金未納ノ者他ノ負債ノ爲メ裁判所ニ於テ身代限ノ處分ヲ受クル時ハ自今左ノ通處分ス可シ此旨相達候事

一貸下金其他諸上納金未納ノ者裁判所ニ於テ身代限ノ處分ヲ受クル時ハ其徴收ヲ取扱フ官廳ニ於テ通常公文用紙ニ未納ノ金額ヲ記載シ証書ノ寫ヲ添ヘ之ヲ其裁判所ニ請求スヘシ

一裁判所ニ於テハ該請求ノ金額ニ就テ負債者異論ナキトキハ身代限ノ配當金ヲ（不足アルトキハ定例ノ通証書ニ裏書ノ上）其裁判所所在ノ郡區長ニ交付シ郡區長ハ之ヲ其官廳ニ送達スヘシ

○明治七年九月四日司法省第廿三號達

金穀ヲ借リ返濟ヲ爲シ能ハサル者裁判所ノ處分ニ因リ身代限ニ遭ヒ候トキ所有物ノ内他人ヘ貸付置キタル金穀ノ証文之レアル節ノ取扱振明治五年壬申第四十號ヲ以テ相達置候處詮議ノ次第有之左之通改正候條此旨相達候事

第一條　各裁判所ニ於テ身代限ノ處分ヲ爲スニ當リ身代限ニ遭フ者ノ物件ノ内ニ身代限ニ遭フ者ヨリ他人ヘ貸付置キタル金穀ノ証文有之時ハ其証文ノ定約期限ノ滿未滿ヲ論セス証文ニ記名シタル負債主ヘ眞僞ヲ尋ヲ無相違時ハ其負債主ヨリ証文面ノ通リ可受取旨身代限ニ遭フ者ノ債主ヘ申渡シ別紙雛形ニ倣ヒ証書ニ裏書ヲ爲シ其主ニ可相渡事

第二條　前條ノ場合ニ於テ債主其証文ヲ受取ルヲ好マサル時ハ其証文ハ身代限ニ遭タル者ニ所持致サセ置クヘキ事

但シ定約期限ノ証文マテ負債主ノ家産些少ナルモ身代限ニ遭フ者ノ債主ニ於テ其ハ

主ノ身代限ヲ以テ現金ノ割賦ヲ受度旨申立ルニ於テハ望ノ通處分スヘキ事

第三條　債主數名ニシテ身代限ニ遭フ者ヨリ他人ヘ貸付置キタル金穀ノ証文一通又ハ數通ナル時ハ數名ノ債主ニ入札致タサセ落札ノ金員ヲ以テ其落札シタル債主ト其他ノ債主トヘ金高ニ應シ配當シ其ノ落札ノ証文ニハ一通毎ニ第一條ノ方法ニ據リ處分スヘキ事

但數名ノ債主盡ク入札ヲ好マサル時ハ第二條ノ處分ニ及フヘキ事

第四條　証文ヲ落札シタル債主証文ニ記名シタル負債主ヨリ金ヲ受取リタル時ハ其金員中ヨリ己レノ受取ルヘキ金高ト之ヲ受取ルニ付テノ諸入費ノ金高トヲ引去リ其餘金ハ証文ニ記載シアル債主ニ返シ而ノ右ノ計算ヲ爲シタル明細勘定書ト餘金ヲ返シタル請取書トヲ以テ裁判所ニ屆出ツヘキ事

第五條　若シ証文ヲ落札シタル債主証文ニ記名シタル負債主ヨリ金ヲ受取ントスルニ証文ニ記名シタル負債主モ亦身代限ニ遭ヒテ証文ニ記シタル金員ノ全部又ハ幾部ヲ返シ能ハサルトキハ証文ニ記名シタル負債主ヨリ証文ヲ落札シタル債主ニ對シ右ノ部分ノ金員ヲ身代持直次第返濟スヘキ旨ノ証文ノ裏書ヲ裁判所ヨリ受取ルヲ得ヘキ事

但此時曩ニ身代限ニ遭タル者ノ裏書証文ヲ持出ヘシ裁判所ニ於テハ之ニ金員ノ差引ヲ記載シ二通ノ証書ヲ一綴ニシテ下附スヘシ

第六條　証文ヲ落札シタル債主証文ニ記名シタル負債主ヨリ金ヲ受取ルヘキ期限ニ至ラサル時証文ニ記載シタル債主即チ曩ニ身代限ニ遭ヒシ人己ニ身代ヲ持直シタルトキハ直ニ其人ニ對シ再ヒ金穀ノ返濟ヲ請求スルヲ得ヘキ事

証文裏書雛形

表書ノ貸主何ノ誰儀年號月日身代限申付候ニ付此証文ハ入札ヲ以テ渡ス時ハ此間ニ入札ヲ以テノ五字ヲ書加フヘシ某府縣管下某國某郡某町某村何ノ誰ヘ相渡候條此証書ノ金額ハ右何之誰ヘ濟方致候上其段當裁判所ヘ可屆出事

年號月日

某裁判所

○明治十六年三月六日司法省丁第十一號達

身代限分配加入訴ノ義ニ付別紙ノ通長野治安裁判所伺ニ對シ及指令候條爲心得此旨相達候事

但該指令ニ抵觸スル從前ノ指令内訓ハ自今消滅シタル義ト心得ヘシ

長野治安裁判所伺（明治十六年二月十七日）

治安裁判所ニ於テ金額百圓未滿ノ訴件身代限處分中金額百圓以上ノ債主其分配加入ヲ始審裁判所ヘ出訴シ其權義確定セシ后該件ヲ受付シ來ルヲ以治安裁判所ハ之ヲ併セ其處分ヲ爲ス右治安裁判所ニ於テ身代限ノ處分ヲ受ケタル原被告ハ他ノ債主ヨリ始審裁判所ヘ金額百圓以上ノ訴ヲ爲セシヿヲ知リ得サル以前ニ在テハ（始審裁判所ヨリ金額百圓以上ノ訴件ヲ受

付サルヽカ又ハ原被告ヨリ他ニ分配加入ノ事件アルトノ申述ヲ聽クニ非レハ他ニ分配加入ノ訴ノ之レナキ者トナシ期ニ至リ分配處分濟ノ後始審廳ヨリ該件ノ到達スル如キ其多少官民ノ手數錯雜スルノミナラス隨テ費用ヲ要ス前顯ノ場合金額百圓未滿ノ訴件治安裁判所ニ於テ身代限處分中同負債者ヘ掛リ其分配加入ノ訴ヲ爲サントスル者ハ其處分ヲナス治安裁判所ヘ直ニ出訴セシメ其治安裁判所ハ該分配事件ニ限リ金額百圓以上ト雖モ都テ之ヲ受理シ判決ヲ與フヘキハ之ヲ與ヘ而ノ該裁判權ハ始審裁判所ニ於テ裁判セシモノト同一ナシ其裁判不服ナルキハ直ニ上等ナル控訴裁判所ヘ控訴スル權ヲ有セシメナハ實際便益不少ノミナラス明治十四年第八十三號御布告ノ權限ニモ敢テ抵觸セサル儀ト被考候條治安裁判所ニ於テハ身代限分配加入ノ訴ニ限リ金額百圓以上ト雖モ受理審判致不苦哉此段相伺候至急何分ノ御指令奉仰候也

指令（明治十六年二月五日）

伺ノ趣身代限分配加入ノ件ハ金額ノ多寡ニ拘ハラス明治七年第七十一號布告掲示案ノ旨趣ニ依リ身代限ノ處分ヲ爲シタル裁判所ニ於テ之ヲ受理スヘク若シ其事件裁判ヲ要スルニ至ルキハ明治十四年第八十三號布告ノ權限ニ照ラシ之ヲ管轄裁判所ニ送附シ其裁判ヲ受ケシメタル上身代限ヲ爲シタル裁判所ニテ分配ヲ爲スヘキモノトス

（二九）証書年月記載法（明治六年六月十四日第二百拾二號布告）

來ル七月十日以後ノ証書類及ヒ公私ノ文書ニハ總テ年號月日ヲ記載可致若シ疎漏ニシテ年月日ノ内何レニモ略記シタルキハ裁判上証據ニ不相立候事

○明治八年二月廿七日司法省甲第一號布達

明治六年第二百十二號ヲ以テ年月日ノ内何レニテモ略記シタル諸証書類及公私文書等ハ裁判上証據ニ不相立旨布告相成候ハ其証書全ク証據ニ不相立儀ニハ之ナク只其年月日ノ早晩ヲ定ムヘキ証據ニ相立サル儀ニ候條右等ノ証書ヲ以テ年月日ノ早晩ニ拘ラス其記入ノ事件ニ付訴訟ニ及フキハ取上ケ裁判ニ及フヘク候條此旨布達候事

（三〇）証據撿閲（明治七年七月九日司法省第十四號達）

聽訟上原被告ヨリ差出ス處ノ証據物ハ其裁判官見認メ有無且取捨ノ振合ニ因リ後來ノ裁判ニモ差響ク筋ニ付今後出訴ノ者之レアルキハ事件ノ採用不採用ヲ論セス其差出ス處ノ証據物本紙ニハ總テ年號月日番號（判事誰或ハ令參事誰）見認メタルヿヲ記載シ押印可致此旨相達候事

○明治十三年十一月十一日丁第二十五號達

本年當省丁第八號達左ノ通改正候條此旨相達候事

明治七年第十四號ヲ以テ聽訟上原被告ヨリ差出ス所ノ証據物云々相達置候處公債証書地券

等ハ記名檢印スヘキ義ニ無之候條此旨爲心得相達候事

(三二一)証據書類取寄方手續(明治十四年六月四日第七號達及丙第十一號達)

裁判上諸役所之帳簿入用ノ節ハ可成必用之分ヲ寫取候儀ト心得右寫ニ正寫之証トシテ各役所之印ヲ捺シ差出シ候樣照會シ紙丁多數要スルトキハ其費用仕拂可申事

但可成寫本ニテ可取計筈ニ候ヘ𪜈裁判事件ニ依リテ元帳ヲ要スル節ハ取寄方照會可致尤遠隔地ニテ運送不便ナルトキハ其地最寄之裁判所ヘ右取寄方及調方共依頼可致事

詞訟審判上必要ニ付其廳並郡區役所及戸長役場所管ノ帳簿等寫取各裁判所ヨリ及照會候節ハ右寫本ニ正寫ノ証トシテ該廳所之印ヲ捺シ同所ヘ差廻候樣可取計事

但寫本多數ニテ費用相掛候節ハ其照會ヲ發シタル裁判所ヨリ仕拂候儀ト相必得且詞訟事件ニ依リ元帳ヲ要スルトキハ差廻方可取計此旨豫テ郡區役所及戸長役場ヘ相達可申事

(三二二)使丁規則(明治十四年十二月五日丁第二十六號達 同十五年一月一日ヨリ施行)

第一條　各裁判所書記局ハ刑事民事ニ關スル召喚狀其他書類ヲ送達セシムル爲メ其請負人ヲ定メ之ヲ使丁取締トス使丁取締ハ一人トス但場所ニ因リ二人以上ヲ命スルヿアルヘシ

第二條　使丁ハ使丁取締之ヲ撰ヒ其氏名ヲ書記局ニ屆出鑑札ヲ受ルモノトス

使丁ノ人員ハ使丁取締適宜ニ之ヲ定メ書記局ノ許可ヲ受クヘシ

第三條　使丁取締ハ送達ノ事ニ付總テ其責ニ任スルモノトス

第四條　使丁取締ハ常ニ裁判所ニ在テ送達ノ事ヲ取扱フヘシ

第五條　使丁ハ送達ヲ爲ストキ裁判所ノ鑑札ヲ帶行スヘシ

第六條　送達ヲ爲スニハ其法律規則ニ從フヘシ

第七條　使丁取締及ヒ使丁ハ訴訟ニ付キ代人トナリテ訟廷ニ出ルヿヲ許サス

第八條　送達ノ事ニ關シ他人ニ損害ヲ被ラシメタルトキハ使丁取締其償ヲ擔當スヘシ

但使丁ノ過失懈怠ニヨルトキハ使丁取締ハ之ニ對シ更ニ其償ヲ求ムルヿヲ得

第九條　(十五年丁第三十四號ヲ以テ本條ヲ左ノ如ク改正ス第十一條モ亦同シ)

送達賃錢ハ地方ノ便否ニ從ヒ書記局ニ於テ適宜其定限ヲ立ツヘシ

但送達書ニ賃錢ノ高ヲ附記スヘシ

第十條　賃錢ノ定限ハ其取扱所ニ貼示シ三日以上新聞紙ニ揭載シ又其他ノ方法ヲ以テ公告スヘシ

第十一條　刑事ニ付テノ送達賃錢ハ其送達ヲ受候者ヨリ之ヲ拂ヘシ

第十二條　刑事附滯ノ私訴及ヒ民事ニ付テノ送達賃錢ハ總テ其送達ヲ請求スル者ヨリ之レヲ拂フヘシ

第十三條　送達賃錢ニ付テノ訴訟ハ其書類ヲ發シタル裁判所ニ之ヲ爲スヘシ

第十四條　使丁取締ハ書類送達ヲ正實ニ取扱フヘキ旨ノ書面ヲ書記局ニ差出スヘシ

第十五條　使丁取締及ヒ使丁ハ此規則ニ違背シタル時裁判所書記局ハ使丁取締ニ左ノ條件中ニテ相當ノ言渡ヲ爲スヘシ

一　貳拾圓以下ノ違約金ヲ定メシムル事

二　解職セシムル事

三　事情重キ者ハ違約金ヲ納メ解職セシムル事

第十六條　使丁取締タルニハ其裁判所々在ノ地ニ家屋ヲ有シ滿二十一歳以上ノ者ニシテ書記局ノ試驗ヲ經ルヿヲ要ス

使丁取締タルニハ身元保証トシテ金五十圓以上ノ價格アル公債証書地券又ハ銀行其他官許アル株券証書ヲ書記局ニ納ムヘシ

但シ此保証金ハ解職ノ時下戻スヘシ

第十七條　試驗ハ書記二名以上ニテ之ヲ爲スヘシ

但シ書記不足ナルトキハ雇ヲ以テ之ニ充ツヘシ

試驗ノ科目ハ左ノ如シ

一　使丁規則　二　受負郡村ノ地名又ハ里數　三　普通書簡ノ書類

第十八條　實決ノ刑ニ處セラレタル者及身代限ノ所分ヲ受ケ未タ辨償ヲ終ラサル者ハ使丁取締又ハ使丁タルヿヲ許サス

(二十三)出訴期限(明治十六年十一月五日第三百六十二號布告)

金穀貸借ヲ始メトシ物品賣買ヨリ其外種々ノ取引等ニ至ルマテ雙方ノ者互ニ受取渡ノ期限ヲ定メ條約ヲ結ヒ置キタルニ一方ノ者其條約ヲ破リタルトキハ早速裁判所ヘ出訴致シ不苦候處延期ノ勘辨ヲ加ヘ出訴ヲ見合候者モ有之是亦慈愛ノ人情ニテ尤ノ事ニ付早速出訴致シ候ヤ又ハ勘辨ヲ加ヘ候トモ人民ノ自由ニ任セ出訴期限ノ法則不相定候處右延期勘辨中數多ノ歳月ヲ過去リ出訴致シ候トキハ貸方借方請人証人ノ内死亡又ハ轉住又ハ失踪等ノ者モ有之事理曖昧ニ立至リ裁判上不都合不少候ニ付訴訟ノ事柄ニ因リ夫々期限ヲ定メ候條來明治七年一月一日ヨリ後ニ結ヒタル條約期限ニテ右出訴期限ヲ過去リ出訴セサル者ハ自分條約ヲ取消シタル者ト看做シ受取ルヘキ者ハ受取ルヘキ權利ヲ失ヒ引渡スヘキ者ハ引渡スヘキ義務ヲ免レ候事ト相定メ候ニ付キ若シ出訴致シ候トモ取上不致候此旨布告候事

出訴期限規則

第一條

一學校ノ授業料

十九年十一月廿六日内閣商人ニ非サリシ者ヨリ商人ヘノ賣掛代金ヲ包含セス

一旅籠料
一運送費
一飲食料
一手付金
一商人互ノ賣掛金
一職人ノ手間代金
一日雇人ノ給料
一請負金
一芝居等ノ木戸錢又ハ桟敷錢等
一男女藝者ノ揚代金

右ハ六ケ月限

第二條

一醫師ノ脈診及ヒ藥料
一授業師ヨリ門弟ニ給與シタル飲食料
一商人ヨリ商人ニ非ラサル者ヘノ賣掛代金
一一ケ年期マテノ奉公人給料

但右等ノ賣掛代金ハ文明ニ付テナキ以テ出ル限リ新規則ニ適用スルノ限リニアラサルモノトス

右ハ一ケ年限

第三條

一期限ヲ定メタル貸附米金及ヒ利息アレハ其利息
一期限ヲ定メタル預米金及ヒ利息アレハ其利息
一家屋及ヒ土地ノ借賃
一小作米金
一証據金
一敷金
一物品ノ借賃又ハ損料
一養育料
一七ケ年期マテノ奉公人給料
一期限ナキ年金及ヒ一生涯ノ年金

右ハ五ケ年限

第四條

一條約証書中期限ナキ者ハ出訴ノ日ヲ以テ期限ト看做シ候故何時出訴致シ候テモ苦シカラサル事

第五條

一從前取結ヒタル條約ニテ明治六年十二月三十一日以前ニ條約期限ノ切レタル事件ハ右明治六年十二月三十一日ヲ條約ノ期限ト看做ス可シ又從前結ヒタル條約ニテ其期限ノ明治七年一月一日後ニ及フ事件ハ條約期限ノ切レタル翌月ヨリ第一條第二條第三條ノ種類ニ從ヒ出訴ノ期限ヲ起算致スヘキ事

但シ明治五年壬申第三百號布告第三條ニ定メタル規則ハ格別ナリトス

○明治十一年三月十一日丁第九號達

甲號　高知裁判所長判事石井忠恭伺（十一年一月十二日）

明治八年四月廿五日滋賀縣伺ノ御指令ヲ玩味スルニ主タル訴件ニ附帶シ訴訟入費曲者ヨリ直者ヘ償却可致旨裁判言渡ノ後直者ヨリ滿六ケ月ヲ經過シテ其償却ヲ請求スルキハ出訴期限第一條ニ據リ直者ニ於テハ要償權利ヲ失シ曲者ニ於テハ期滿得免ノ權ヲ得ルニ至ル然ルニ主タル訴件ニ限リ權利者ニ於テ荏苒數年ノ久ヲ經過スルモ裁判執行ヲ請求スルヲ得ルハ允當ナラサル樣被相考等シク是レ直者ノ曲者ニ於ケル如ク本案ニ關スル（賃貸代金貸金）等ノ訴件モ初審又ハ終審裁判言渡當日ヨリ起算シ夫々該訴ノ種類ニ應シ出訴期限ノ約條ヲ經過シテ權利者ヨリ裁判執行ヲ請求スルキハ權利者ニ於テハ裁判權利ヲ拋棄シ義務者ニ於テハ其義務ヲ免レタルモノト看做シ裁判執行ノ請求狀及却下可然哉至急御指令ヲ仰キ候也

乙號　太政官ヘ上申（十一年八月二日）

別紙高知裁判所伺ノ趣ヲ審思スルニ裁判言渡ノ後更ニ執行ヲ請求セス荏苒歲月ヲ經過スル者ハ固ヨリ期滿得免ノ効ヲ得ヘシ何トナレハ裁判言渡ニ因リ裁判ヲ執行スルノ權義ヲ生ゼシムルヲ以テ其權義ニ付必ス期滿得免ノ効アラサルヘカラサレハナリ抑モ斯ノ期滿得免ハ訴訟原案ノ種類ニヨリ期滿得免ノ長短ニ拘ハラサル可シ蓋シ裁判言渡サル者ハ雙方ノ間ニ更ニ裁判上ノ契約ヲ生セシムルノ理アルヲ以テナリ我國現行ノ出訴期限（六年第三百六十二號布告）ヲ視ルニ裁判執行ノ出訴期限ニ於テハ明文アルヿナシ而シテ其最モ長キ者五年ナリトス因テハ該伺ノ如キ訴訟原案ノ種類ニ拘ハラス滿五年ヲ以テ期限トナスヿ允當ト思考スルニ因リ左ノ通指令可及ト存候得共明文ナキヲ以テ此段申稟候也

丙號　指令

伺ノ趣裁判執行ノ出訴期限ハ出訴期限規則第三條ニ準據シ五ケ年タルヘシ

（三四）宗教上訴訟受理方（明治十三年十一月一日司法省伺定）

別紙熊本裁判所長寺島判事ヨリ宗教上ニ關スル訴訟受理方ノ儀伺出候處右ハ元來司法裁判所ニ於テ受理スヘキ件ニ無之儀ト存候得共目今ニ在リテハ尋常民事ノ詞訟同樣該裁判所ニ

付シ審判爲致可然歟何分ノ御裁令ヲ仰キ度訴答書類相添ヘ此段相伺候也

明治十三年八月廿日

朱書

伺ノ趣ハ受理裁判スヘキ者ニ非ラス

別紙

明治十一年内務省第五十七號達ニ依リ廢寺再興願ノ儀ニ付信徒共ヨリ宗教取締リニ對シ本山管長ヘ差出ス添翰願書ノ取次ヲ要シタリシカ其願書取次呉レサルトテ信徒共ニ於テ取締ヲ被告ト爲シ本山添翰拒一件ノ目安ヲ揭ケ訴出候然ルニ右一件ハ宗教取締ノ職掌ニ關カリ候得共既ニ僧徒ノ儀ハ明治七年第八號ヲ以テ一般ノ職分同樣ニ可心得云々公布有之ノミナラス宗教上ニ關スル訴訟事件ノ取扱方別段ノ御規則モ無之上ハ尋常民事ノ訴訟同樣受理裁判致シ不苦哉否伺上候條尤モ差掛リ候事件有之ニ付至急何分ノ御指揮有之度候也

熊本裁判所長

判事　寺島　直

明治十三年五月廿六日

田中司法卿殿

(三五)詞訟代人差出方(明治十七年一月廿四日司法省第一號布達)

明治十三年五月司法省甲第二號布達左ノ通改正ス

詞訟又ハ勸解ニ付己ムヲ得ス代人ヲ出タサントスル者ハ親屬又ハ相當ノ者ヲ撰ミ管轄裁判所ノ許可ヲ受クヘシ但代人タル者同時ニ二人以上ヨリ二件以上ヲ受任シ其他不適當ノ所爲アリト認ムルトキハ裁判所ニ於テ差止ムルコトアル可シ

(三六)質入証文出訴期限(明治十八年六月十九日内務省第廿號達)

地所質入書入建物船舶書入質ノ公証ヲ受ケタルモノハ出訴期限無之旨今般太政官ノ裁令ヲ經候條爲心得此旨相達候事

附錄

(三七)裁判事務心得(明治八年六月八日第百三號布告)

第一條　各裁判所ハ民事刑事共法律ニ從ヒ遲滯ナク裁判スヘシ疑難アルヲ以テ裁判ヲ中止シテ上等ナル裁判所ニ伺出ルヿヲ得ス但シ刑事死罪終身懲役ハ此例ニ非ス

第二條　凡ソ裁判ニ服セサル旨申出立ル者アル時ハ其裁判所ニテ辨解ヲ爲スヘカラス定期ニ依リ期限内ニ控訴若クハ上告スヘキ事ヲ言渡スヘシ

第三條　民事ノ裁判ニ成文ノ法律ナキモノハ習慣ニ依リ習慣ナキモノハ條理ヲ推考シテ裁

判スヘシ

第四條　裁判官ノ裁判シタル言渡ヲ以テ將來ニ例行スル一般ノ定規トスルヿヲ得ス

第五條　頒布セル布告布達ヲ除クノ外諸官省隨時事ニ就テノ指令ハ將來裁判所ノ準據トスヘキ一般ノ定規トスルヿヲ得ス

(三八)裁判所官制(明治十九年五月四日勅令第四十號布告)

明治廿年勅令第六十二號ヲ以テ改正

第一　職員

第一條　本令中裁判所トアルハ治安裁判所始審裁判所重罪裁判所控訴院大審院及高等法院ヲ總稱ス

裁判官トアルハ裁判所ノ長局長評定官判事試補ヲ總稱シ檢察官トアルハ檢事長檢事及檢事試補ヲ總稱ス

「第二條　治安裁判所始審裁判所控訴院大審院ニ左ノ職員ヲ置ク

治安裁判所		
判事	若干員	奏任五等又ハ六等
判事試補	若干員	奏任五等又ハ六等
檢事	若干員	判任
勸解吏		
書記		判任
始審裁判所		
長	一人	奏任一等乃至四等 奏任現任長ノ次等以下五等ニ至ル
判事	若干員	奏任二等乃至五等
判事試補	若干員	
檢事	若干員	
檢事試補	若干員	
書記		判任
控訴院		
長	一人	勅任一等又ハ二等
評定官	若干員	奏任一等乃至四等
東京控訴院ニ限リ勅任二等ノ評定官ヲ置クヿヲ得		
檢事長	一人	勅任二等又ハ奏任一等
檢事	若干員	奏任二等乃至四等
書記官	一人	奏任四等
書記		判任

大審院
長　一人　勅任
局長　三人　勅任二等
評定官　若干員　勅任二等又ハ奏任一等乃至二等
檢事長　一人　勅任二等
檢事　若干員　奏任一等乃至三等
書記官　一人　奏任四等
書記　判任

第三條　第十七條ニ指定スル局長勅任ノ評定官ヲ以テ之ニ充ツルノ外ハ奏任一等ノ評定官ヲ以テ之ニ充ツ

第四條　重罪裁判所及高等法院ノ職員ハ治罪法ノ定ムル所ニ依ル

第五條　裁判所ノ職員中定員ヲ限ラサルモノハ判任官ヲ除クノ外事務ノ繁簡ニ應シ司法大臣ノ閣議ヲ經テ定ムル所ニ依ル

第六條　試補ノ規則ハ別ニ定ムル所ニ依ル

第七條　治安裁判所管轄區域内ニ執行吏ヲ置ク判任トス

第八條　裁判官及檢察官トナルノ資格ハ別ニ試驗法ノ定ムル所ニ依ル

第九條　刑法第二編第四章第一節乃至第六節第九章第二節第二百八十四條乃至第二百八十七條第三編第二章第一節乃至第六節ニ掲タル重輕罪ヲ犯シテ有罪ナリトノ言渡ヲ受ケ其盲渡ノ確定シタルモノハ裁判官及檢察官タルコトヲ得ス

第十條　大審院長局長評定官控訴院長檢事長及始審裁判所ノ長ヲ除クノ外裁判官及檢察官ハ任所ハ司法大臣ノ定ムル所ニ依ル

第十一條　新ニ裁判官ニ任セラルヽモノハ治安裁判所ニ於テ其職務ニ服シ治安裁判所裁判官又ハ檢察官ニシテ一年以上其職務ニ服シタルモノハ始審裁判所裁判官ニ任スルコトヲ得

裁判官檢察官ニシテ五年以上其職務ニ服シタルモノハ控訴院裁判官ニ任スルコトヲ得

裁判官檢察官ニシテ十年以上其職務ニ服シタルモノハ大審院裁判官ニ任スルコトヲ得

第十二條　裁判官ハ刑事裁判又ハ懲戒裁判ニ依ルニアラサレハ其意ニ反シテ退官及懲罰ヲ受クルコトナシ

第二　分課及職務

第十三條　裁判所ノ權限及裁判官ノ所掌ハ訴訟法治罪法及其他法律命令ノ定ムル所ニ依ル

第十四條　治安裁判所裁判官ノ分課ハ訴訟事件ノ種類又ハ土地ノ區域ニ從ヒ一周年毎ニ所轄始審裁判所長ノ定ムル所ニ依ル但治安裁判所ノ便宜ニ依リ其管轄ノ區域内ニ於テ臨時

分課外ノ職務ヲ行フコトアルヘシ

第十五條　治安裁判所裁判官ハ司法大臣ノ命ニ依リ其裁判所所在地外ニ於テ期日ヲ定メ法廷ヲ開クコトアルヘシ

第十六條　始審裁判所裁判官ノ分課ハ一周年毎ニ始審裁判所長ノ上申ニ依リ訴訟事件ノ種類又ハ土地ノ區域ニ從ヒ所轄控訴院長ノ定ムル所ニ依ル

第十七條　控訴院ハ民事刑事ノ類別ニ依リ須要ニ從ヒ數局ヲ置ク各局中ノ分課ハ一周年毎ニ控訴院長ノ上申ニ從ヒ事件ノ種類又ハ土地ノ區域ニ從ヒ大審院長ノ定ムル所ニ依ル局長及局員ヲ定限スルモ亦同シ但控訴院長ナシテ院中一局ノ長ヲ兼チシメ自余ノ局長ハ遞次上席ノ評定官ヲシテ之ヲ兼チシム

第十八條　第十六條第十七條ニ指定シタル分課ハ其分掌ノ偏重ナルトキ又ハ其主任ニ缺員若クハ引續キ差支アルニアラサレハ定期間之ヲ變更スルコトヲ得ス但前年ニ審理ヲ始メ未タ終結セサル事件ハ從來ノ主任裁判官ヲシテ終結セシムルコトヲ得

第十九條　大審院ニ民事第一局民事第二局及刑事第一局刑事第二局ヲ置ク民事第一局ハ上告事件ノ受理不受理ヲ審判シ民事第二局ハ受理シタル事件ヲ審判シ刑事第一局ハ刑法ニ關スル上告事件ヲ審判シ刑事第二局ハ諸罰則ニ係ル上告事件ヲ審判ス

民事第二局ノ長ハ大審院長ナシテ之ヲ兼チシメ評定官ハ司法大臣ノ上奏ニ依リ其各局分任ヲ命ス

第二十條　治安裁判所裁判官差支アルトキ其職務ヲ代理スヘキモノハ一周年毎ニ所轄始審裁判所長ノ豫メ定ムル所ニ依ル若シ其裁判所ニ於テ代理スルモノナキトキハ最近ノ治安裁判所裁判官ヲシテ代理セシム

第二十一條　始審裁判所長差支アルトキハ上席ノ判事之ヲ代理ス

判事中差支アルトキ其職務ヲ代理スヘキ順序ハ一周年毎ニ裁判所長ノ豫メ定ムル所ニ依ル若シ其裁判所ノ判事中代理スルモノナキトキハ所轄治安裁判所ノ裁判官ヲシテ臨時代理セシム

第二十二條　控訴院長差支アルトキハ上席評定官之ヲ代理ス

評定官中差支アルトキ其職務ヲ代理スヘキ順序ハ一周年毎ニ院長ノ豫メ定ムル所ニ依ル若シ其院ノ評定官中代理スルモノナキトキハ所轄始審裁判官ヲシテ代理セシム

「第二十三條　大審院長差支アルトキハ上席ノ局長之ヲ代理ス

局長中差支アルトキ其局上席ノ評定官之ヲ代理ス各局評定官中其職務ヲ代理スヘキ順序ハ一周年毎ニ院長ノ豫メ定ムル所ニ依ル若シ其院ノ評定官中代理スルモノナキトキハ最近ノ控訴院裁判官ヲシテ代理セシム」

第二十四條　治安裁判所判事始審裁判所長控訴院長及大審院長ハ司法大臣ノ指揮ヲ承ケ其廳務ヲ整理シ及司法ニ關スル行政ヲ掌理ス

第二十五條　大審院長ハ其院及控訴院ヲ監督シ控訴院長ハ其院及所轄裁判所ヲ監督シ始審裁判所長ハ其裁判所及所轄治安裁判所ヲ監督ス

第二十六條　控訴院大審院ノ局長ハ其局ノ所掌ニ屬スル裁判事務ヲ指揮ス

第二十七條　治安裁判所ヲ除クノ外裁判所ニ檢事局ヲ置キ檢察官ヲシテ治罪法及訴訟法ニ定ムル職務ノ外司法ニ關スル事項及司法ノ行政ニ關スル事項ニ付監督ノ職務ヲ行ハシム其處務ノ規程ハ別ニ定ムル所ニ依ル

治安裁判所ニ於テハ別ニ檢事局ヲ置カス檢事試補ヲシテ其所轄ニ屬スル檢察事務ヲ掌ラシム但檢事試補ヲ置カサルノ治安裁判所ニ於テハ警察官郡區長戸長ヲシテ檢察事務ヲ行ハシムルコトヲ得

第二十八條　各檢事局ノ管轄ハ其所在裁判所ノ管轄區域ニ依ル

第二十九條　檢察官ハ其職務上其所在裁判所ニ從屬セサルモノトス

第三十條　檢察官ニハ裁判官ノ職務ヲ行ハシムヘカラス又其職務ヲ監督セシムヘカラス

第三十一條　檢察官差支アリテ止ムヲ得サル場合ニ於テハ裁判所長ハ司法大臣ノ認可ヲ承ケテ裁判官中ヨリ臨時代理ヲ命スルコトアルヘシ

第三十二條　大審院檢事長ハ所屬檢事及控訴院檢事長ヲ監督シ控訴院檢事長ハ所屬檢事及所轄內ノ檢事及司法警察官ヲ監督ス

第三十三條　檢察官ハ職務上其所屬長官ノ命令ニ服從スヘシ司法警察官ノ檢事ノ補助官トナリタルトキモ亦同シ

第三十四條　始審裁判所檢事局ニハ檢事長ヲ置カス上席檢事ヲ以テ之ニ充テ始審裁判所及其所轄內ニ在ル治安裁判所ノ檢察事務ヲ指揮シ其局所掌ノ事務ヲ掌理セシム

第三十五條　控訴院檢事長ハ其局所轄ノ事務ヲ掌理シ其局及其所轄ノ檢察官ヲ指揮ス

第三十六條　大審院檢事長ハ其局ノ檢事ヲ指揮シ及其局所轄ノ事務ヲ掌理ス

第三十七條　控訴院及大審院ノ書記官ハ書記ヲ指揮監督シテ文書記錄會計ノ事務ヲ掌ル

第三十八條　裁判所ノ書記ハ上官ノ指揮監督ヲ承ケ訴訟法治罪法及其他法律命令ノ定ムル所ニ依リ文書記錄會計ニ從事ス

始審裁判所以上ノ裁判所ニ於テハ檢事局ニ書記ヲ置ク其職務ハ前項ニ同シ

第三十九條　執行吏ハ治罪法訴訟法及其他法律命令ノ定ムル所ニ依リ文書ノ送達及判決命令ノ執行ヲ掌ル

第三　執務及休暇

第四十條　治安裁判所及始審裁判所ノ審理判決ハ裁判官一人ニテ之ヲ行ヒ控訴院ノ審理判

決ハ主任局長ヲ合セテ裁判官三人大審院ノ審理判決ハ主任局長ヲ合セテ五人合議列席シテ之ヲ行フ

第四十一條　裁判ヲ爲スニハ前條ニ指定シタル主任裁判官ノ外列席スルコトヲ得ス但審問數日ニ渉ルヘキトキハ其裁判所中自余ノ裁判官ヲシテ立會ハシムルコトヲ得

第四十二條　裁判所ノ會議及議決ハ之ヲ公行セス其狀況及結果ハ一切之ヲ漏洩スルコトヲ許サス

第四十三條　合議列席シテ審理判決ヲ行フ場合ニ於テハ主任局長其會議ノ長トナリテ議事ヲ整理シ訴件ノ要點ニ就テ問議ヲ提出シ列席員ヲシテ各意見ヲ述ヘシム其問議ノ事項及提出ノ方法順序又ハ決議ノ査定ニ關シ各員ノ間ニ異見ヲ生スルトキハ列席員ノ最多數ヲ以テ之ヲ決スヘシ

第四十四條　決議ノ際各員異見ヲ述フルノ順序ハ各其任官ノ前後ニ依リ後任ノ裁判官ヨリ始メ局長ヲ最後トス任官ノ同日ニ係ルトキハ年少ヨリ始ム但專任ヲ命シタル事件ニ關シテハ其專任裁判官ヨリ之ヲ始ム

第四十五條　凡ソ裁判ハ過半數ノ議決ニ依リ之ヲ行フ

金額ニ關シ裁判官ノ意見三說以上ニ分レ其說各過半數ニ至ラサルトキハ過半數ニ至ルマテ最多額ノ意見ヨリ順次寡額ノ意見ニ合算ス

刑事ニ關シ有罪無罪ノ問議ヲ除クノ外其意見三說以上ニ分レ各過半數ニ至ラサルトキハ過半數ニ至ルマテ被告人ニ不利ナル意見ヨリ順次利益ナル意見ニ合算ス

第四十六條　大審院ニ於テ裁判前例ニ違ヘル裁判ヲ爲サントスルトキ又ハ司法大臣ノ諮問ニ應シ司法制度ニ關スル意見ヲ提出セントスルトキハ總會議ヲ開クコトヲ得

總會議ハ院中ノ裁判官三分ノ二以上ヲ以テ之ヲ開キ院長其會議ノ長トナリテ其議事ヲ整理シ其議決ハ最多數ニ依ル若シ可否同數ナルトキハ議長ノ決スル所ニ依ルノトス

第四十七條　治安裁判所及始審裁判所ハ裁判上ノ處分ニ關シ互ニ補助ノ囑托ニ應スヘキモノトス

第四十八條　檢察官其職務ヲ行フニ付必要ナル場合ニ於テハ互ニ補助ノ囑托ニ應スヘキモノトス

第四十九條　書記又ハ執行吏他ノ裁判所ノ管轄内ニ於テ其職務上ノ處分ヲ爲スノ必要ナル場合ニ於テハ互ニ補助ノ囑托ニ應スヘキモノトス

第五十條　裁判所ノ休暇ハ七月十一日ニ始マリ九月十日ニ終ル

第五十一條　休暇中ハ左ノ事件ニ限リ裁判ス

一　刑事

二　差押事件

三　身代限ニ關スル事件

四　家宅ノ貸渡使用明渡及借家人ノ借宅ニ現存スル物品引留ニ付家主ト借家人トノ間ニ生スル事件

五　爲換事件

六　養料ノ請求

七　既ニ着手シタル建築ノ繼續ニ關スル事件

以上事件ノ外ト雖モ原告若クハ被告ノ申立ニ由リ別段ノ至急ヲ要スルモノト裁判所ニ於テ認定シタルトキハ之ヲ裁判スルコトアルヘシ

前諸項ノ事件ヲ裁判スル爲ニ裁判所長ハ休暇中臨時主任ノ局又ハ委員ヲ定ムヘシ

○明治十九年五月四日閣令第十號布告

始審裁判所治安裁判所判事檢事ノ職務ハ當分內現任判事補檢事補ヲ以テ之ヲ行ハシムルコトヲ得其官等俸給ハ從前ノ通タルヘシ

(三九)裁判所官吏年俸(勅令第四十一號明治十九年五月四日)

第一條　裁判官檢察官大審院控訴院書記官ノ年俸ハ別表定ムル所ニ依ラシム

第二條　現任裁判官及檢察官ノ年俸ハ舊ニ依リ支給ス新ニ裁判官檢察官大審院又ハ控訴院ノ書記官ニ任セラルヽモノ又ハ現任ノ裁判官檢察官ノ今後官等ヲ陞敍セラルヽモノハ別表定ムル所ニ依リ其年俸ヲ支給ス

別表

官等	勅任			奏任						
	一等	二等		三等		四等		五等		六等
年俸	五千五百圓	上 五千圓	下 四千五百圓	上 四千圓	中 三千五百圓	下 三千圓	上 二千八百圓	中 二千六百圓	下 二千四百圓	千二百圓	千百圓	八百圓	五百圓	四百圓	三百圓

(四〇)裁判所處務規程(明治十九年七月一日司法省令丙第八號)

裁判官

第一條　各裁判所ハ一年間各局又ハ各裁判官ノ每週開クヘキ訟廷ノ日割ヲ豫定シ廳內公衆ノ知リ得ヘキ場所ニ之ヲ掲示スヘシ

開廷ノ期日ニハ當日裁判スヘキ事件ヲ引續キ審理判決スヘシ

第二條　訴訟人喚出ノ時刻及審判ノ順序ハ訴訟人ノ便宜ヲ計リ各裁判官之ヲ定ムルヿヲ得

第三條　各裁判所ニハ訟廷出勤簿ヲ設ケ裁判官ヲシテ開廷ノ時刻前之ニ押印セシメ局長又ハ裁判所長直ニ之ヲ調査シテ後檢印シ若シ欠勤者アルトキハ欠勤ノ理由及其結果ヲ出勤簿ニ記入ス但シ其抄錄ハ裁判所ノ長毎月之ヲ司法大臣ニ進達スヘシ

第四條　裁判官文書ヲ受ケタルトキハ直ニ其處分方ヲ文書ノ余白又ハ別紙ニ記載シ之ヲ書記ニ下附スヘシ

文書ノ處分一時ニ結了シ能ハサルトキハ後日提出ノ期限ヲ豫定シテ之ヲ書記ニ下附スヘシ

第五條　裁判書其他重要ナル文書ノ原按ハ裁判官自ラ之ヲ作ルヘシ

第六條　裁判官差支アルトキ之ヲ代理スヘキ者ヲ豫定スルニハ其事務ニ妨クナキヲ要スルヲ以テ成ルヘク差支アル者ト同日ニ訟廷ヲ開カサル裁判官ヲ撰ヒ置クヘシ

第七條　裁判官ノ分課ハ事件ノ種類又ハ土地ノ區域ニ依リ之ヲ定ムト雖モ事務ノ繁簡ニ從ヒ甲局ノ裁判官ヲシテ乙局ノ事務ヲ兼掌セシムルヲ得

第八條　各裁判所（治安裁判所ヲ除ク）ニ於テハ其廳ノ行政事務ニ關シ裁判官總會議ヲ開クヲアルヘシ

但檢事長又ハ上席檢事ハ其會議ニ出席シテ意見ヲ述フヘシ

總會議ハ過半數ノ裁判官出席スルニ非サレハ之ヲ開クヲ得ス其會議ハ裁判所ノ長ヲ以テ議長トス

第九條　總會議ニ於テ議スヘキ事項左ノ如シ

一廳內ノ執務細則ヲ設定變更スルヲ

一廳內雇員ノ取締規則ヲ定ルヲ

一裁判區畫ノ變更ニ關シ司法大臣ニ意見ヲ述フルヲ

一法律及諸規則ノ執行ニ關シ檢事長又ハ上席檢事ヨリ請求アリタル事項ヲ議決スルヲ

一司法大臣ヨリ諮問ニ付シタル法律ノ草按ニ付意見ヲ述ルヲ

一裁判所附屬吏員ノ組合ヨリ提出シタル意見ヲ審査スルヲ

第十條　控訴院ニ於テハ所轄裁判所ノ一般ニ遵守スヘキ司法省令及訓令ノ施行細則ヲ議定スル爲メ臨時總會議ヲ開クヲアルヘシ

第十一條　控訴院ハ毎年九月十五日（休暇日ナレハ翌日）ニ於テ總會議ヲ開キ前年八月ヨリ其年ノ七月迄一年間所轄裁判所ノ執リタル裁判事務ノ成蹟ニ關スル檢事長ノ報告ヲ聽キ匡正スヘキ弊害アレハ相當ノ處分ヲ評決スヘシ

第十二條　控訴院長始審裁判所長ハ十二月初旬ニ於テ總會議ヲ開キ其廳翌年中各裁判官ノ分課代理ノ順序及開廷ノ日割ヲ豫定スル爲メ其意見ヲ詢フヘシ

第十三條　控訴院始審裁判所ノ裁判官ニ欠員アルトキハ十日以內ニ控訴院長其候補者二名又ハ三名ヲ指定シテ司法大臣ニ具申スヘシ

書記官及書記ニ欠員アルトキハ控訴院長檢事長ト協議連署スヘシ若議協ハサルトキハ各自

ニ候補者ヲ指定シテ具申スヘシ

始審裁判所ノ裁判官ニ欠員アルトキ其候補者ヲ指定スルニハ豫メ其裁判所長ニ書記ノ候補者ヲ指定スルニハ其裁判所長及上席檢事ニ諮問スヘシ

第十四條　治安裁判所ニ缺員アルトキハ十日以内ニ裁判官ニ付テハ所轄裁判所長書記ニ付テハ上席檢事ト協議連署シ候補者二名又ハ三名ヲ指定シテ所屬控訴院長ニ具申スヘシ控訴院長ハ之レニ意見ヲ付シテ司法大臣ニ進達スヘシ但シ書記ニ付テハ檢事長ト協議連署シテ具申スヘシ

第十五條　前二條ノ場合ニ於テ裁判所ノ指定シタル候補者ノ取捨ハ司法大臣ノ權内ニアリトス

第十六條　控訴院長ハ檢事長ト協議シ司法大臣ノ名義ヲ以テ其廳及所轄裁判所判任官吏ノ增俸及轉動ヲ攝行スルヿヲ得大審院長ノ其廳書記ニ於ケルモ亦同シ但シ始審裁判所及治安裁判所判任官吏ニ付テハ控訴院長豫メ始審裁判所又ハ上席檢事ニ諮問スヘシ

始審裁判所判任官其管内限リノ轉動ハ裁判所長又ハ上席檢事之ヲ控訴院長又ハ檢事長ニ具申スルヿヲ得

前各項ノ場合ニ於テハ攝行ノ後直ニ司法大臣ニ具申スヘシ

第十七條　裁判所ノ長ハ所轄裁判所裁判事務ノ整理ヲ視察スル爲メ其他必要ノ場合ニ於テハ司法大臣ノ認可ヲ得管内ニ出張又ハ巡回スルヿヲ得但シ出張ニ付認可ヲ得ルノ暇ナキトキハ出張ノ後直ニ司法大臣ニ報告スヘシ

第十八條　裁判所ノ長ハ會計收支命令ノ事ヲ掌リ及會計事務ヲ勘査スヘシ

控訴院長ハ一定ノ期限内ニ其院及所轄裁判所ノ豫算決算表ヲ司法大臣ニ提出スヘシ

第十九條　控訴院長ハ會計事務勘査ノ爲メ其必要ナル場合ニ於テハ書記ヲ所轄裁判所ニ出張セシメ又ハ所轄裁判所ノ書記ヲ招喚スルヿヲ得

第二十條　裁判所ノ長ハ各其主掌ニ係ル諸表ノ調製ヲ管理シ司法大臣ニ進達スヘシ

第二十一條　裁判所ノ長ハ其廳ノ印章ヲ調製シ其印影ヲ司法省ニ進達スヘシ但治安裁判所ノ判事ハ所屬始審裁判所長ノ許可ヲ得テ製調スヘシ

第二十二條　裁判所ノ長ハ其廳經費定額内ニテ雇員ヲ使用スルヿヲ得但治安裁判所判事ハ所屬始審裁判所長ノ許可ヲ得テ之ヲ使用スヘシ

第二十三條　控訴院長ハ其廳及所轄裁判所ノ職員（勅任官ヲ除ク）ニ對シ司法大臣ノ名義ヲ以テ除服出仕ヲ命シ及例規ノ賜暇ヲ許否スルヿヲ得

第二十四條　始審裁判所長ハ其廳及所轄治安裁判所職員（檢察官ヲ除ク）ノ考績ニ付毎年八月所屬控訴院長ニ報告ヲ爲スヘシ但シ書記以下ニ付テハ上席檢事ト協議スヘシ

控訴院長ハ其廳及所轄裁判所職員（檢察官ヲ除ク）ノ考績ニ付毎年九月司法大臣ニ報告ヲ爲スヘ

シ但シ書記官以下ニ付テハ檢事長ト協議スヘシ

第二十五條　始審裁判所長ハ檢事ノ意見ヲ詢ヒ毎年其廳裁判官中ヨリ豫審掛ヲ指名シ司法大臣ニ具申スヘシ

第二十六條　始審裁判所長ハ治安裁判所々在地外ニ法廷ヲ開クヿヲ必要ト認ムルトキハ司法大臣ニ具申スヘシ

第二十七條　始審裁判所長治安裁判所判事ハ書記ノ分任ヲ定メ書記數名アルトキハ一名ヲ書記長ニ命スルヿヲ得

第二十八條　裁判所ト中央官廳トノ間ニ往復スル文書ハ總テ司法大臣ヲ經由スヘシ

第二十九條　始審裁判所長治安裁判所判事ヨリ司法大臣ニ申稟報告スヘキモノハ總テ監督上官ヲ經由スヘシ但特別ナル場合ハ直ニ司法大臣ニ申稟報告スルヿヲ得

第三十條　第三條第二十條ニ定メタル裁判所長ノ職務ニ關スル規則ハ治安裁判所判事ニモ亦之ヲ適用ス

第三十一條　裁判所官吏ノ事務取扱ニ對スル抗告ハ其監督上官之ヲ判定シ最終ノ抗告ハ司法大臣之ヲ判定ス

檢察官

第三十二條　檢事ハ檢事長ノ代理者タルヲ以テ其特別委任ヲ俟タスシテ各自其本務ヲ行フヿヲ得但シ檢事數名アル時ハ檢事長ハ裁判所ノ事務分課法ニ依リ檢事ノ分任ヲ定ムルヿヲ得

第三十三條　檢事ニ分任シタル事件ト雖モ被告人ノ身分又ハ事件ノ性質ニ依リ重大ナルモノハ檢事長自ラ之ヲ取扱フヘシ若シ自ラ取扱フコト能ハサル場合ニ於テハ特別ノ注意ヲ要ス

又左ニ記載スル書類ノ原按及正本ニハ檢事長ノ署名捺印ヲ要スルモノトス

一重罪公訴狀

一告訴告發ヲ受ケタル事件ニ付起訴ヲ爲サヽルノ通知書

一監督上官ニ差出スヘキ書類

一上訴再審哀訴ニ關スル書類

一特赦ノ上申書

一檢事ノ處分ニ對スル抗告ノ判定書

一中央官廳及地方廳トノ往復書類

第三十四條　控訴院檢事長ハ管內代言人ノ取締上必要ト認ムル規則ヲ設ケ之ヲ告達スルヿヲ得

始審裁判所上席檢事ハ管內代言人ヲ監督シ其能否ニ付隨時控訴院檢事長ニ報告ヲ爲シ控

訴院檢事長ハ之ヲ司法大臣ニ報告スヘシ其名簿ニ變更アルトキモ亦同シ

第三十五條　檢事其所在地外ニ臨檢スヘキトキハ檢事長ノ許可ヲ受クヘシ

第三十六條　控訴院檢事長ハ司法大臣ノ命令又ハ認可ヲ得テ管内ヲ巡視シ法律命令ノ執行ニ關スル利弊ヲ監査スヘシ

又檢事長ハ必要ナル場合ニ於テ司法大臣ノ認可ヲ得隨時管内ニ出張シ又ハ管内ノ檢事ヲ招喚スルヿヲ得但シ時機急迫ニシテ認可ヲ得ルノ暇ナキトキハ出張又ハ招喚ノ後速ニ其旨ヲ具申スヘシ

第三十七條　檢察官ハ其監督上ノ職務ニ付隨時司法大臣ニ機密報告ヲ爲スヘシ

第三十八條　始審裁判所上席檢事ハ毎年八月其所在裁判所及治安裁判所ノ前一箇年間取扱ヒタル事務ノ擧否及其弊害ヲ匡正スルノ方法ヲ所屬控訴院檢事長ニ具申スヘシ

第三十九條　控訴院檢事長ハ毎年九月十五日ニ開クヘキ總會議ノ席ニ於テ管内裁判所ノ前一箇年間取扱ヒタル事務ノ擧否及其弊害ヲ匡正スルノ方法ヲ演說スヘシ

第四十條　前條演說ノ筆記ハ九月下旬ニ之ヲ司法大臣ニ進達シ及ヒ所轄裁判所ニ送致スヘシ

第四十一條　第四條第十三條第十四條第二十條第二十一條第二十二條第二十三條第二十四條第二十八條第二十九條第三十一條ニ定メタル規則ハ檢察官ニモ亦之ヲ適用ス

第三十三條第三十五條第三十六條ニ定メタル檢事長ノ職務ハ始審裁判所上席檢事ニモ亦之ヲ適用ス

附則

第四十二條　始審裁判所支廳ノ上席判事ハ本規定ニ照準シ其廳及管内ノ行政事務ニ付キ本廳長ノ代理ヲ爲シ其上席檢事ハ本廳上席檢事ノ職務ヲ行フモノトス但控訴院長檢事長又ハ司法大臣ニ進達スヘキ文書ハ本廳ヲ經由スヘシ

明治法規大全上卷　終

訴院檢事長ハ之ヲ司法大臣ニ報告スヘシ其名簿ニ變更アルトキモ亦同シ

第三十五條　檢事其所在地外ニ臨檢スヘキトキハ檢事長ノ許可ヲ受クヘシ

第三十六條　控訴院檢事長ハ司法大臣ノ命令又ハ認可ヲ得テ管内ヲ巡視シ法律命令ノ執行ニ關スル利弊ヲ監査スヘシ

又檢事長ハ必要ナル場合ニ於テ司法大臣ノ認可ヲ得隨時管内ニ出張シ又ハ管内ノ檢事ヲ招喚スルヿヲ得但シ時機急迫ニシテ認可ヲ得ルノ暇ナキトキハ出張又ハ招喚ノ後速ニ其旨ヲ具申スヘシ

第三十七條　檢察官ハ其監督上ノ職務ニ付隨時司法大臣ニ機密報告ヲ爲スヘシ

第三十八條　始審裁判所上席檢事ハ毎年八月其所在裁判所及治安裁判所ノ前一箇年間取扱ヒタル事務ノ擧否及其弊害ヲ匡正スルノ方法ヲ所屬控訴院檢事長ニ具申スヘシ

第三十九條　控訴院檢事長ハ毎年九月十五日ニ開クヘキ總會議ノ席ニ於テ管内裁判所ノ前一箇年間取扱ヒタル事務ノ擧否及其弊害ヲ匡正スルノ方法ヲ演說スヘシ

第四十條　前條演說ノ筆記ハ九月下旬ニ之ヲ司法大臣ニ進達シ及ヒ所轄裁判所ニ送致スヘシ

第四十一條　第四條第十三條第十四條第二十條第二十一條第二十二條第二十三條第二十四條第二十八條第二十九條第三十一條ニ定メタル規則ハ檢察官ニモ亦之ヲ適用ス

第三十三條第三十五條第三十六條ニ定メタル檢事長ノ職務ハ始審裁判所上席檢事ニモ亦之ヲ適用ス

附則

第四十二條　始審裁判所支廳ノ上席判事ハ本規定ニ照準シ其廳及管内ノ行政事務ニ付キ本廳長ノ代理ヲ爲シ其上席檢事ハ本廳上席檢事ノ職務ヲ行フモノトス但控訴院長檢事長又ハ司法大臣ニ進達スヘキ文書ハ本廳ヲ經由スヘシ

明治法規大全上卷　終

外1304
け

欠

MISSING

一禁令ハ制裁ノ有無ニ拘ラス罰則ノ編ニ付記シ裁判所官制ハ特ニ訴訟法ノ末尾ニ付錄ス

一各法律ニ付從スル公布伺類ハ渾テ本法ノ末尾ニ付記ス

一法文條項ニ改正增補アルモノハ其欄外ニ改正增補ノ年月番号ヲ記シ文詞ハ原文ニ挿入シ「」ノ符号ヲ付シ又削除ハ其條下ニ削除廢止ノ年月ヲ記ス

一本書ノ如キ編纂ハ從前其類多シト雖モ浩瀚ニ渉リ索引ニ便ナラサルアリテ或ハ疎漏ニシテ實用ニ足ラサルアリテ余常ニ執務上隔靴ノ嘆ナキ能サルヨリ簡便實用ヲ主トシ此編纂ニ着手セリ然レモ誤謬脫漏ナキ能ハス讀者幸ニ之ヲ諒セヨ

明治二十一年四月

編者識

スルナ

14.7
26

147
26

禁電子式複写

031137-001-9

CZ-5-014

明治法規大全

河村　幸雄／編

上

M21

BBC-1122

26. 4. 27